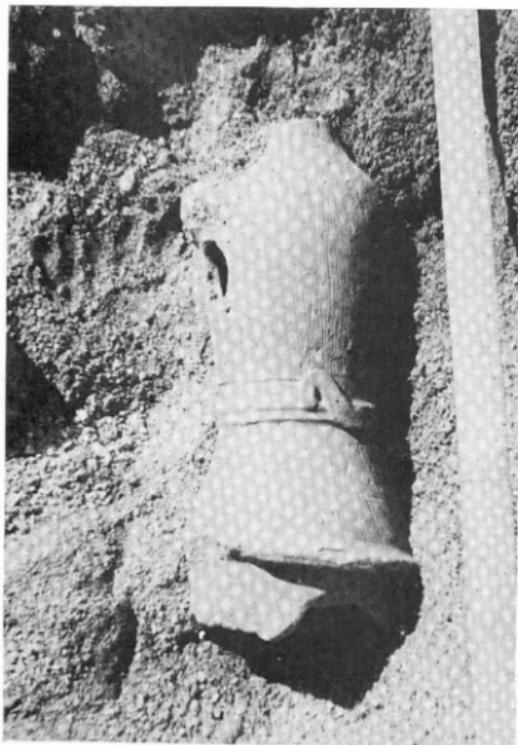


岩子山古墳



1975

松山市教育委員会

岩子山古墳調査報告書

1975

松山市教育委員会

刊行にあたって

本県ではこの種の論考はまだ多くは出ていない。この報告者名本二六雄君はすでに小学生時代に当地方で見出せないと言われた木葉状文土器を松山市持田町の水道工事現場で見出し、その後、大阪大学法学部に進学してからも、藤直幹教授編の『河内における古墳の調査』中の遺物の実測整理に携わるなど斯学への関心の深さを示している。この間同君が中学生時代（現在の愛媛大学教育学部付属校の前身在学中）の考古クラブ員として研究したという岩子山古墳の一括遺物の散逸を惜しみ、またその墳丘の荒廃を案じ、当時の記録や記憶をたどり、これらをまとめて郷土文化の顕彰と県内考古資料の整備充実とを念じ、松山市教委当局の援助をえて版にされることになった。

適當な専門の指導助言者もなしに調査をするなどは厳に慎しむべきであるが、すでに出土した遺物遺構を無下に放置することもまた遺憾なことである。従って、せめてそれらを記録保存し、さらにそれらに検討と論究を加えることは無意義ではなくむしろ緊要不可欠なこととも考えられる。

ここに名本君が当資料を出来るだけまとめ討究を尽そうとされる折角の努力が実り多きことを念じてやまない。愛媛大学退官の日、求められるままに非礼ながらも愚筆を弄した。

昭和50年4月1日

愛媛県文化財専門委員

西 田 栄

例　　言

- 愛媛県地方の遺物・遺跡、及び近來の考古学概要については、愛媛大学故松岡文一工学博士、西田栄教授より多大の御教示を賜った。
- 遺物、特に須恵質埴輪円筒の研究法については、日本考古学協会 神戸商船大学助教授 北野耕平氏より有益な助言を受けた。
- 岩子山古墳及び周辺古墳の資料については岡山県庁文化課 正岡睦夫氏より多大の提供と援助を受けた。
- 関連文献の示唆を考古学研究会会員、名古屋考古学会会員 伊藤楨樹氏より受け、また多くの論議も行った。
- ガラス玉の成分分析については、名古屋考古学会 吉村睦志氏をわざらわした。
- 本報告書の写真・図版は筆者の手になるものかほとんどである。
なお、写真については古墳発見当初のものを使用するところが多かったため、鮮明でないものがあるが、これは原画が既に失なわれ、複写・拡大によるものが多いためである。

岩子山古墳 目次

はじめに	1
愛媛県下遺跡の歴史的背景.....	2
I 位置と環境	
1 環境・立地	3
2 調査の経過	5
II 岩子山古墳群の構成	
1 岩子山古墳群	6
III 岩子山第1号墳の墳丘について	
1 墳丘及び墳形について	10
2 外部施設	11
(1) 舟石	11
(2) 造り出し	12
(3) 墳輪列	12
IV 内部主体	
1 内部主体の推定	13
V 岩子山古墳の副葬品	
1 内部主体周辺の遺物出土状態	15
2 遺物各説	16
(1) 鉄製素環頭太刀	16
(2) ガラス製玉類	17
(3) 石製模造品	19

VII 墳丘外表の遺物

1 墳輪類の出土状態	21
2 円筒埴輪	22
(1) 須恵質円筒埴輪	22
(2) 土師質円筒埴輪	23
3 朝顔形円筒埴輪	24
4 形象埴輪	24
(1) 人物埴輪	24
(2) 馬形埴輪	25
(3) その他の形象埴輪	28
5 墳丘外表より採集した須恵器片について	29
(1) 器台脚部片	29
(2) 坯 片	31
VII 岩子山古墳の築造年代	33
VIII 岩子山古墳の歴史的意義	35
あとがきに代えて	39

図 版 目 次

図版 1	岩子山古墳遠望（東方より）岡野保氏提供	46
図版 2	岩子山古墳遠望（同上）	47
図版 3	岩子山 2 号墳より古照遺跡方面を望む。（昭和30年頃）	48
図版 4	岩子山古墳南麓部の調査	49
図版 5	岩子山古墳墳丘（南方より）昭和30年7月	50
図版 6	岩子山古墳墳丘（西方より）昭和30年12月	50
図版 7	岩子山古墳全景（西方より）昭和30年12月	51
図版 8	葺石散乱状況（昭和30年）	51
図版 9	ガラス製丸玉	52
図版10	ガラス製丸玉断面	52
図版11	石製模造品（表面）	53
図版12	石製模造品（裏面）	53
図版13	人物埴輪	54
図版14	馬形埴輪頭部	55
図版15	馬形埴輪片	55
図版16	形象埴輪片	56
図版17	円筒埴輪	56
参考図版 1, 2	須恵器円筒埴輪片・別府町清水神社出土	57
参考図版 3	埴輪・高井町波賀部神社出土	57

図 目 次

第1図	松山市西北部の古墳群分布	4
第2図	岩子山古墳群の構成	7
第3図	岩子山古墳実測図（昭和30年）	8
第4図	岩子山古墳実測図（1968年正岡睦夫氏による）	9
第5図	内部主体の状況（盗掘坑）	11
第6図	埴輪検出状況（昭和30年6月）	14
第7図	素環頭大刀	17
第8図	ガラス製玉類実測図	19
第9図	石製模造品	20
第10図	円筒埴輪	22
第11図	埴輪馬鞍部破片	26
第12図	埴輪馬杏葉部その他	27
第13図	四足獸埴輪片	29
第14図	弧線文入埴輪片	30
第15図	革蒂形埴輪・筒状埴輪	30
第16図	器台形須恵器脚部拓影	32
第17図	器台形須恵器片実測図	32
第18図	岩子山古墳下方より出土の須恵器（正岡睦夫氏による）	34

はじめに

報告書執筆の経過

岩子山古墳が世上を賑わしてから、既に20年の歳月を経た。

その間、この遺跡から検出した遺物は重視されたこともあったし、場合によっては等閑視されたこと也有った。昭和33年代に一応の報告書を、当時、愛媛大学の附属中学生であった筆者が、ガリ版刷で30数頁のものを出版したのであったが部数も少く幼稚なものであったために広くゆきわたることがなかったことと内容自身もさほどのものでなかつたせいか、十分に意を尽さず、また、諸文献に引用されるにあたっても誤った点が多く見られ残念に思っていたところ、今回、正式の報告書となることができ学界のためにも望外の幸せである。

遺物を収容している附属中学校も移転し、資料室も度々変ったようで、その度毎に重要な遺物が損傷し、出土当時の有様を正確に伝えるのは筆者の図面と写真のみによるというようなものも少くない。一方では、墳丘自身が20年、10年の歳月のうちに変容を来たし、当時の実測図と現今と合致しないようなところもある。

総じて、これらの点は早く学界にその詳細を報じ、研究の一助とすべきでありながら、今まで草稿を籠底に藏していたのは一重に筆者の怠惰が故である。その間、古照遺跡の発見や学界の動向は日進月歩の状況にあり、岩子山古墳の極めて重要なこと明白になりつつあるとき、任に耐えずと言えども、当事者の故を以って報告を為さんとするものである。

末筆ながら、出版をしていただいた松山市教育委員会に深謝の意を表すと共に、御多忙のところ再三にわたって資料の御提供をいただいた愛媛大学 西田栄教授に深甚の謝意を申し述べたい。そしてまた、常に激励を賜った今は亡き故松岡文一工学博士に対し追悼の意を、本文によって捧げんとするものである。

愛媛県下遺跡の歴史的背景

愛媛県の枢要部は、瀬戸内海の沿岸南部にまたがっており、近代のみならず古代にあっても東部・中部・西部と大きく3分割してみることが可能である。

古墳時代にあっては、これを東部と一括してよいものであるかどうかは別にして、著名な川之江市東宮山古墳や新居浜市金子山古墳のような中期末から後期初頭かと思われる遺物豊かな古墳が散見し、それ以降でも小規模ながら群集墳の形成が行なわれて歴史時代に入つてゆく。^{註1}

中部地方は道前平野を一帯とする地域であつて、唐子山古墳群は古墳時代前期より出発し、^{註2}以降中期・後期へと連続とその系譜を辿ることが可能であるし、群集墳形成の時期においては、県下最大と目される朝倉古墳群やまた甲賀原古墳群があり、終末期と考えられる舟山古墳群にもその繁栄した残映を見せながら、法安寺址、更に国分寺、国分尼寺に連続している。^{註3}

同時に、相の谷古墳は古式の最も整備した形であり、雉之尾古墳も古式の典型である点、^{註4}更には大日臺山古墳群や樹之本古墳が中期と考えられる点からすれば、この地域は未整理の状況ではあるが、きわめて順調な古墳文化を展開したものと考えざるを得ない。^{註5}

西部地方においては、肥沃な道後平野を中心であるが現在のところ、古墳文化に関する研究が進展を開始したのが極めて遅かった故もあって、それほど目立った成果をあげていないのが実情である。その中にあって、先年発掘調査が行なわれ、教育委員会から報告書の刊行された三島神社古墳は、学術的に調査されたものとして、内容的にも白眉のものであり、また、近辺には経石山古墳や波賀郡神社古墳のような平地に営まれた前方後円墳も次第に明瞭になりつつあり、古く発掘されたものの中にも、川上神社古墳のように全国でも稀に見る鉄地金銅張鐘形杏葉やその伴出品などを見る限りにおいては、看過できない地域であることは最早言うまでもなく、ただ惜しまらくは、古く開発され、極端な場合は消滅してしまった古墳の中に極めて貴重なものがあったであろうという点のみが今後の考究の妨げとなるように思われる。

しかしながら、該地方においても、大下田古墳群のある伊予郡に接する伊予市の客池に存した古墳より椿井大塚山古墳出土と同範とされる天王日月・獸文帶四神四獸鏡が検出されており、道前平野に劣らず発展が速く又繁栄した地域であったことが首肯されるのである。^{註6}

このような現状を踏まえながら、道後平野の一角に存し、古くより知られていながら、なおその詳細について広く知られることのなかった岩子山古墳に關し、遺跡及び遺物の詳細を本報告で明らかにしようと言うものである。

岩子山古墳に關しては、その出土遺物については、古くから知られているものの、詳細に関し曖昧な点が多く、諸文献に引用されるにあたっても、他の古墳出土の遺物との混同が多く、他方、出土しながら記載洩れも目立つておらず、そうした点、本報告において正確な知見を得ていただければ幸甚である。^{註7}

I 位置と環境

1 環境・立地

道後平野は西方を海に面し、三方は四国山脈及び高龜山系から派生した丘陵に囲まれ、丁度三角形の形状をなしている。平野部は、その大部分が、平野の中央部を継続する重信川と石手川によって形成された沖積地であって、平野の各处に地盤である独立丘陵が点々と存在している。

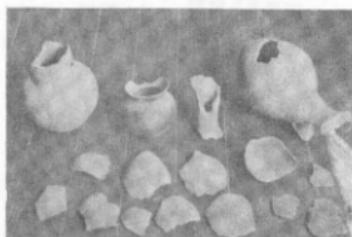
西方の豊予海峡に面する側は、直接海と接するのではなく、特に北部では海岸線から僅か1km内外のところは、丁度海をかこむかのように、大峰台から派生した小丘陵やその他弁天山と称する小独立丘が高々百米位の高さではあるが海と平野北部との障壁を形成している。

現在の松山市街地は、道後平野の北に偏した部位を中心をおき、地盤である松山城山を中心に戻開している。

岩子山古墳は、松山市北斎院に所在し、岩子山が大峰台の一支丘として西方に小高くなつた丘陵から南方に伸びる稜線の中腹にあって、古墳の存在する地点はむしろ狹いながらも平坦地と称してよい程の、海拔約百mの地点にあり、道後平野の東南部及び南西部を真下にのぞめる景勝地にあって、近年著名となつた古照遺跡はその真下にある。

近在の遺跡地をあげるならば、同古墳群の西側斜面は弥生末から土師器の散在地となっており、また岩子山下西北の味生小学校校庭より土師器の出土をみている。古照遺跡はこの山の東南にあって1kmと離れておらず、さらに岩子山に接続する大峰台には箱式石棺が点々と存在するが現在のところ特に顕著な古墳は見当らない。^{註16} ただし、大峰台では、本古墳に近い一地点より、かつて線刻狩獵文のある弥生式土器とみられるものが一片採集されている。^{註17}

岩子山は、現在の松山港（かつて熱田津に擬

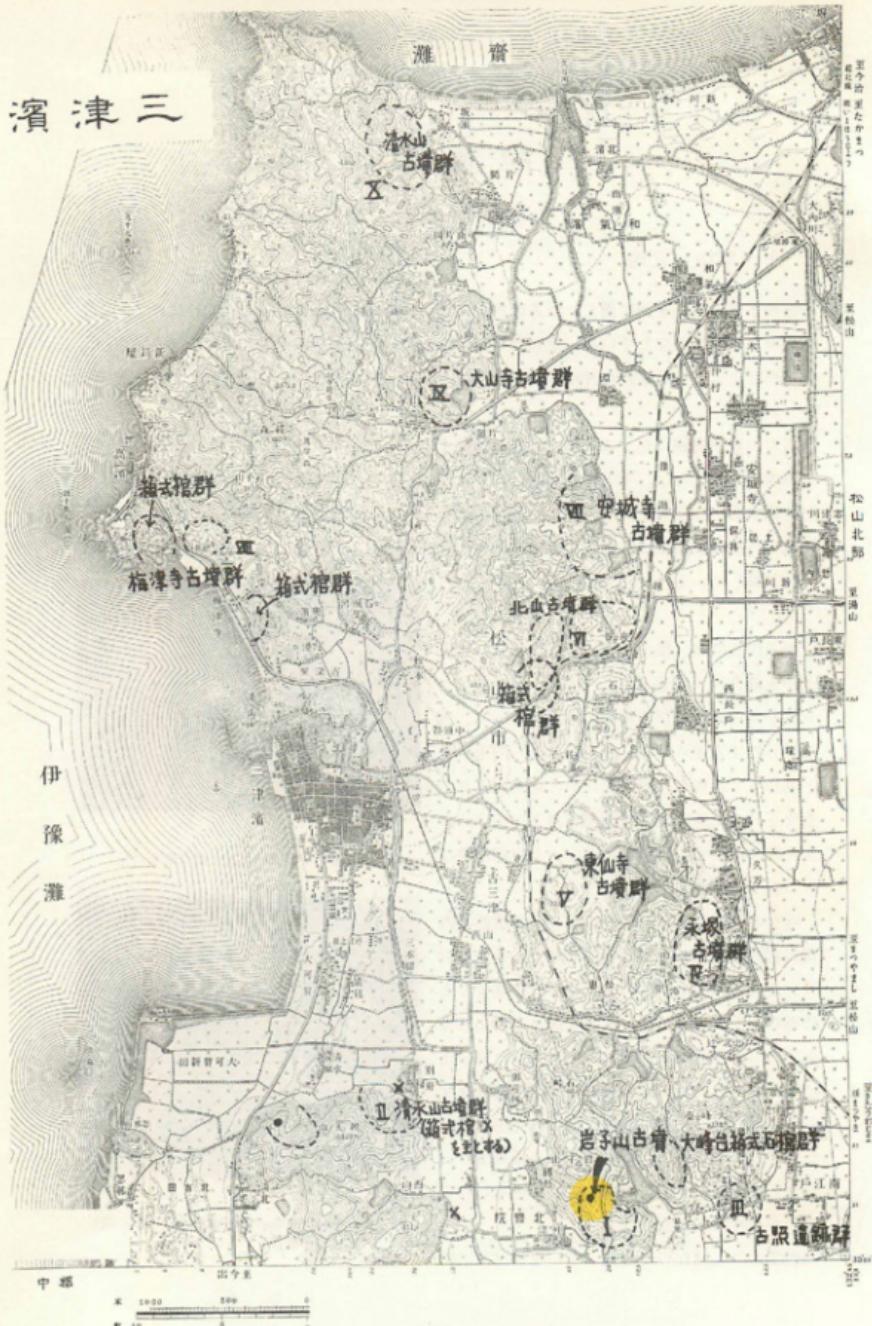


(写真1)
味生小学校校庭出土土器（昭和31年）



(写真2)
北山古墳群中の一古墳（昭和29年頃）
人物は西田教授

三津濱



第1図 松山市西北部の古墳群分布

せられた)をかこむ低丘陵群の一つであるが、西隣の弁天山塊にも古墳が点在し、また岩子山^{註19}に北接する山塊は久万台と称し、後期古墳が著しく、この西北方の梅津寺方面の丘陵端にも多くの横穴式石室を持った群集墳があり、その西方、最も海に突き出した高山と称する小山には箱式石棺の群集がみられたが、現在削平されてその痕跡もなくなってしまっている。^{註20}

また、梅津寺の丘後の東方やや海から遠ざかったあたりの北山の一帯は、このあたりではやや規模が大きいとみられる直径20m前後の円墳が古式の横穴式石室をもってかなり現存している。

^{註21} 総じて、現在の松山港をかこむ丘陵一帯はすべて何らかの群集墳を形成しているかの如くである。

こうした景観の中には、岩子山古墳の場合、おそらくは耕作地帯であったろう古照遺跡及びその向うの平野一帯を見下すべく立地している点は充分に留意しておかねばならないと考える。

それとまるで好対象を為すように、道後平野の北部、現在の東野台地から、久米、川上地域の山麓地帯には、経石山古墳三島神社古墳、波賀部神社古墳、川上神社古墳のように50m前後の前方後円墳が点々と存在し、地域的な面からすれば、若干隔絶した感をいだかせるものもある。

2 調査の経過

岩子山古墳については、完全な発掘調査は未だ行なわれていない。昭和三十年春頃のことであるが、当時愛媛大学教育学部附属中学校の生徒で、現在丸善石油に勤務する森棟正氏が散策の傍ら、岩子山に登り、かなり手ひとく中心部が盗掘されていた同古墳を発見し、當時考古学クラブを主宰していた筆者に通報されたのがそもそもその発端である。

現地に急行したところ、通有の小円墳であったが、頂部に深さ1mに達する盗掘跡があり、かきあげられた黒色土の中に赤色ガラス小玉、埴底にも同様のものがあり、丁寧に土こしを



(写真3)
北山古墳群中の一古墳
横穴式石室



(写真4)
北山古墳副葬品 |(左端のペン)
(は長さ12cm)

行うと黄色や緑色の小玉が採集可能の状態にあった。

発見者の森棟氏は、発見当初盗掘塙底より素環頭の大刀を拾得しており、これがため、小規模ながらきわめて重要性を持つものとの認識をもって筆者に急報してくれたものである。

それ以降、附属中学校の考古学クラブのメンバーと共に墳丘の観察、実測を行いつつ、古墳にこれ以上の改変を与えることなく遺物——主として埴輪類——の採集を行い現状保存につとめたのであるが、以後10年余を経て西田教授指揮の下に正岡陸夫氏等が実測及び遺物の表面採集をされた折には墳丘にも若干の変化が認められ、更には筆者等が調査した当時相当稠密にみられた葺石状のものも殆んど見逃される程に消え去っていたとのことである。^{註22}

発見当初、本報告に記載する岩子山古墳以外に、その稜線の下降するあたり一帯に、稜線に沿って少なくとも5基の円墳が確認されたのであるが、これらについても、昭和43年に正岡陸夫・戸梶聖夫・表邦男・木原和憲氏等が実測調査された際には「近くには他に3基の古墳址がある。いずれも果樹園に開墾されていて石材がつみ重ねられている。名本氏の報告書にはさらに2基あったとあるが現在確認できない。すべて円墳である」とされ、発見当初より^{註22}10数年の歳月を経てかなり激しく改変している模様である。

II 岩子山古墳群の構成

1 岩子山古墳群

昭和33年には既に岩子山古墳及びその近傍の墳丘の実測を終え、昭和35年11月にその概要を「岩子山古墳」としてプリント刷りで30部程配布をしたのであるが、それには簡単な略図が添えてあるに留まるため、本稿において詳細を記し、その後の知見を加えることにしたい。

岩子山古墳は、大峰台の一支丘であるが、東・北・西部は各々急峻であって、わずかに南方に向って稜線がゆるやかに下っている。しかし、それも頂部より30mばかりは同様に急激に下降し、その地点でやや広がって勾配の少ない広場を形成する。広場の長さは約70m、巾は30mに充たない程であるが、本報告記載の岩子山古墳は山頂から急激に下った稜線が、この平坦部に接するあたりに円丘を持っているため、墳丘より、広場の端が再び稜線に沿って下降する地点までが、主丘に連続する前方後円墳の低平な前方部の如きおもむきを呈する。実際に実測図によってみられるように、この点のみからすれば前方後円墳と判断することも可能であろうが、この点に関しては後で詳述することにしたい。

岩子山古墳に統いて更に下降する稜線上には、分布図（第2図）に示す如く、稜線の地形

に左右されながらも昭和33年当時では少くとも5基の円墳が存在しており、この配列の順序に従って最上位に存在するものから第1号墳（岩子山古墳と通称するもの）から第6号墳まで付番した。

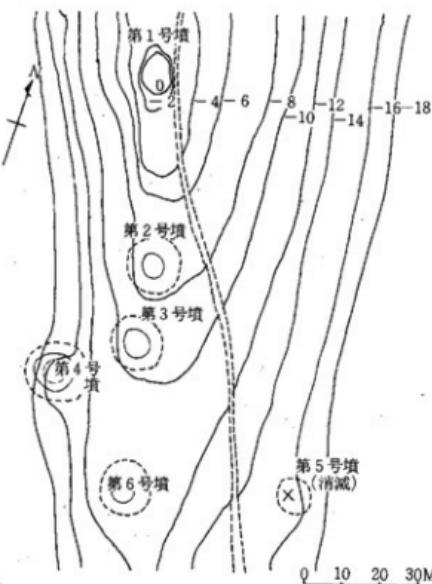
當時にあっては第5号墳の傍に人頭大の自然石が雑然と積み重ねられていた以外は、すべて低平ではあったが整美な円墳状をなしており、特に第4号墳は規模も大で他の円墳がすべて15m内外であるに対し20mを超える規模を持ち、墳丘上で唯一片ではあったが磨滅の甚しい埴輪円筒の細片を採集した。もっとも、これについては、第1号墳から何者かが持ち運んだものであるかも知れず、第4号墳に埴輪が樹立されていたことの証左にはなり得ない。第6号墳より

下側についても、古墳の存在がか

つてはあったかと思われるが、當時既に開墾が著しく、何らその証跡を見出すことができなかった。

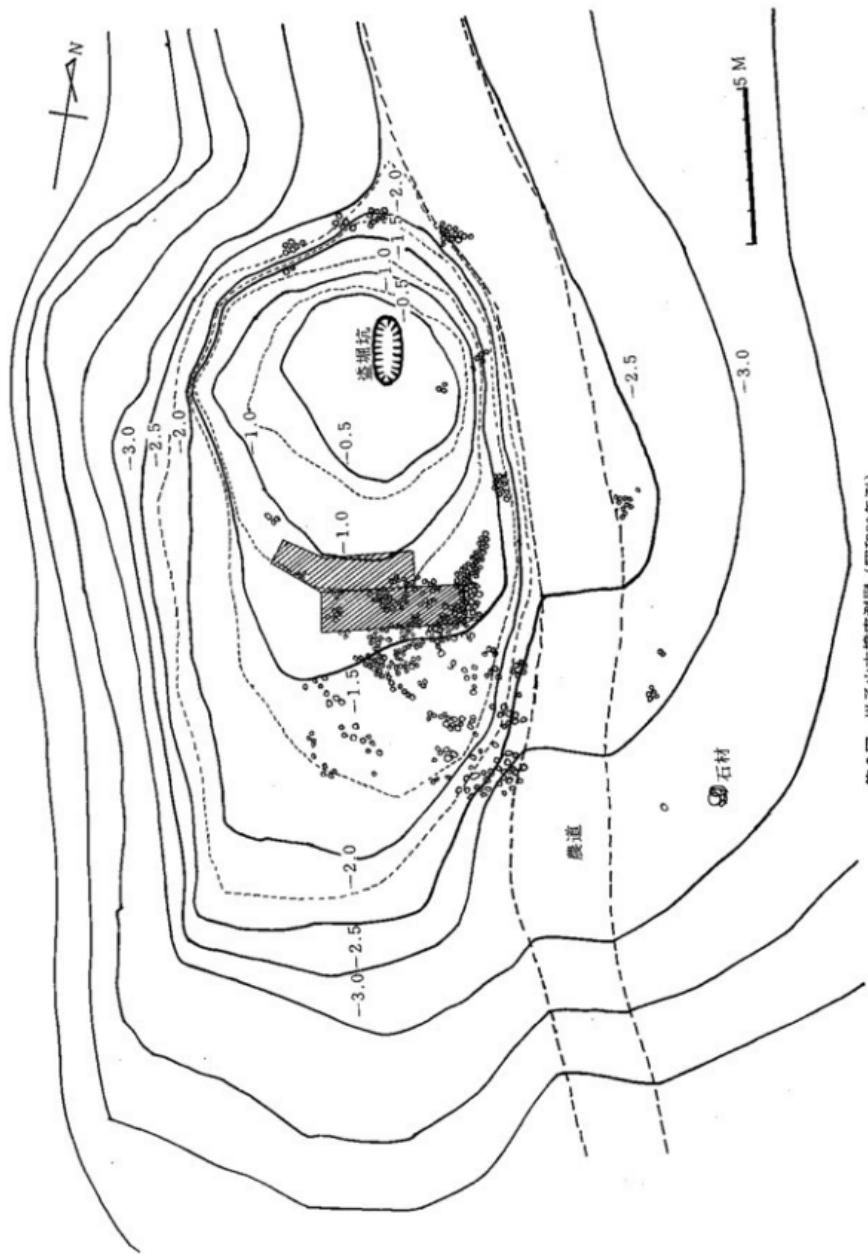
なお、後述するように、第1号墳の内部構造が、石室を持たなかつたことは事実であるため、判明している古墳についてはすべてボーリング探査を行ったのであるが、第3号墳については確実に石室様のものが存在することを確認し得たが、他の古墳については深さ1.5mではそれらしい手掛りを得ることができず、第1号墳と同様石室以外の、たとえば木棺直葬とでも言うような構造であったのか、あるいは既に石材が抜きとられて痕跡を留めなかつたのかは明らかでない。しかし、第5号墳側にみられたように、取り出した石材を近傍に積み重ねたり、小石材をも見出し得ないことを勘案すれば、こうした古墳にあっては、横穴式石室は構築されなかつたものとして考えるのが至当であろう。

このような観察からする限り、岩子山古墳群は、群集墳の形態をとるとは言え、最大に見積っても20基を超えることのない小規模な集合体であつて、朝倉古墳群にみるような大規模なものではなかつたことが結論づけられるであろう。もっとも第2図にみられるところ、當



第2図 岩子山古墳群の構成

第3圖 岩子山古墳測量圖（昭和30年測）

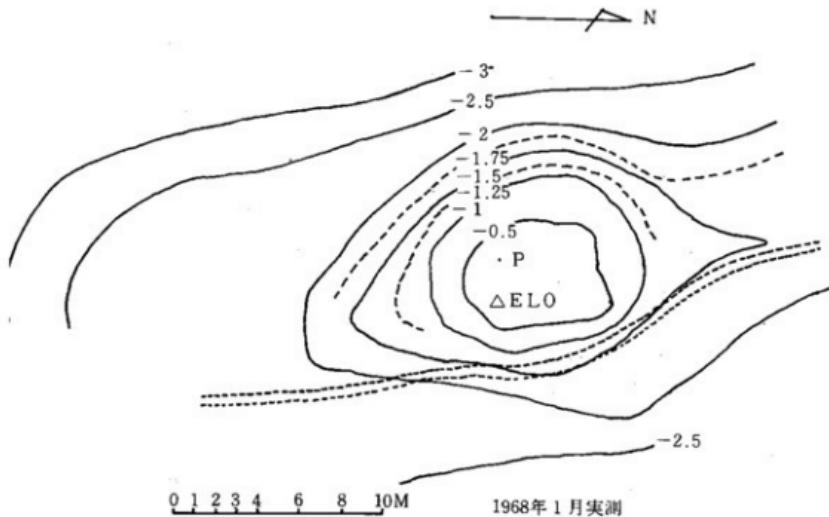


時墳丘が確認されたのが6基のみであり、それ以下の稜線部分についてもかなりの広さをもってなだらかに下降し、丘陵の村社に至っているので、相当数の古墳の存在は予測し得たのであるが開墾が著しく、発掘を行ってみなければ確証をあげることはできなかった。

しかしながら、本古墳群にあっては、第1号墳がもっとも高所を占め、且つ、平坦部分に墳丘を構築しているため、これが、主墳であって、もっとも古く營まれたものであろうことは容易に推測でき、順次2号墳、3号墳と丘を下って造営されて行ったと推定される。

古墳群の構成そのものについては、この稜線にのみ限られていたかどうかは疑問が持たれ、谷を介した東側の尾根上でも森棟氏が鉄鏃塊を採集しており、現在墳丘を明瞭に見出すことはできないが、古墳又は類似の遺構が存したことは明らかであり、これも地理的な近接さから考えれば岩子山古墳群に加えて考えるべきであろうし、そうだとすれば古墳群の広さは相当大きなものとなり得る可能性がある。

また、第18図に示した須恵器は、正岡氏らが岩子山第1号墳を実測した際、1号墳より200m程東下部分から採集されたとのことであり、その界隈にも古墳のあったことが知られるのであって、岩子山古墳群の拡がりを推定するよすがともなるわけである。



第4図 岩子山古墳実測図（正岡氏等による）

III 岩子山第1号墳の墳丘について

1 墳丘及び墳形について（第3図・第4図）

調査がややゆき届いているのは、古墳群中最上位にある第1号墳であるため、まず墳丘について詳細に述べることにしたい。（尚、第1号墳は通称岩子山古墳と呼ばれているため、以降はこの名称を以って文中常用することとする。）

まず、墳形に関してであるが、岩子山古墳発見当初より、これを小形の前方後円墳とみるか、単純な円墳とみるかについては、調査当事者間でも意見のわかれるところであった。

前方後円墳とみた場合、センターマイナス3.0mあたりの等高線をとった場合、前方部が南方に向って伸びる、極めて低平なそれを持つ全長25m、前方部巾12m、後円部径13mの規模を持つものとなり、当時の葺石の散布状況及び外観・形状からすれば、「可能性のある」という程度であった。実際、西方からの景観はいかにも前方後円墳らしく見えるのであるが、かと言って東方から見た場合は、尾根上の平坦面に孤立する全くの円墳と見えるのであって発掘を伴わない外形調査からは、積極的な判断は下し難いものがある。もし、前方後円墳とすれば前方部は地山そのものであって、若干それに修正を加えたに過ぎないであろう。

一方、円墳とみた場合には、岩子山古墳の南方平坦部が広くひらけており、第2号墳以下が稜線の下降する狭い尾根上に築かれており、何故、この平坦面を利用しなかったかに疑問が残ると共に、下方から古墳を見上げる際には、平坦地の最も奥まったところに位置しているために充分に仰ぎ見ることを得ず、かつ本墳からの眺望も良くないという疑問点が残ることになる。しかし、総じていえば、現在の本墳の形をみると、独立した円丘が平坦面に存したといいい方が最もふさわしいのであり、一般的には円墳と解釈する方が無理なく思えるのである。この場合、墳丘の封土は、上層を黒色有機質土層、下部は黄色粘土質土層とする完全な盛り土墳であることになる。（第5図）

ところで、調査当初、円丘南麓に埴輪片が著しいため、採集に努めたのであるが、この際、円丘の南正面で多数の形像及び円筒埴輪を採集している。

前方後円墳とすれば、くびれ部に相当する箇所であるが、埴輪の配列にあたって、明らかに調査された例では、くびれ部の墳丘を横断して並べられた事実は管見では存しない。だとすれば、南方平坦部が前方部となる前方後円墳の可能性は極めて薄いものとなり、円墳の可能性が高いと言わねばならない。

後1期の円墳における埴輪配列については精査された例が乏しく、これを以って墳形の判断基準にするわけにはゆかないかも知れないが、形象埴輪の集まるあたりは、たとえば岡山県森山原四ツ塚第13号墳、及び群馬県上芝古墳、栃木県芳賀郡亀山古墳を例とすれば円墳に
註23 註24 註25

造り出しを設け、その内に形象埴輪を配置することが知られており、こうした事実からすれば、岩子山古墳の場合も、円墳南麓に小さな造り出しを設け、そこに形象埴輪を配置したもののように考えることができる。

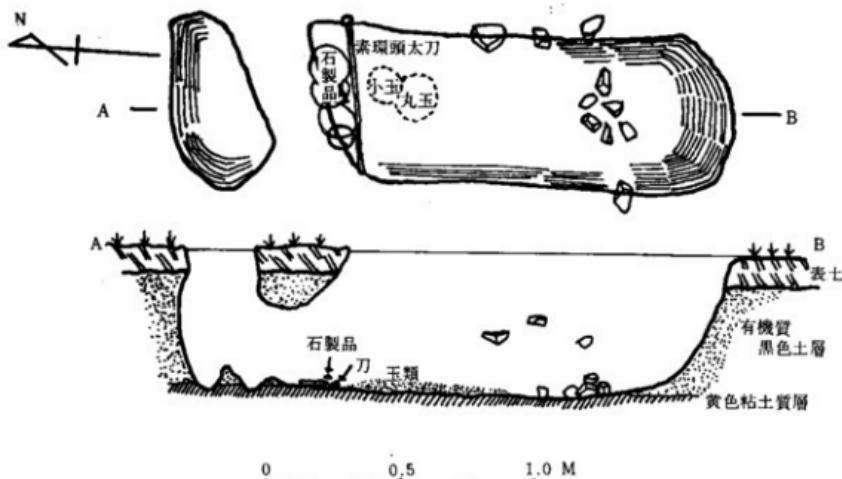
岩子山古墳の墳形は、精査されていないため断定を避けるとしても、南方に造り出しを持った、径12~14m程度の小円墳であるとしておきたい。

次に、墳丘の築成に関する事項であるが、盜掘痕の清掃の際に墳丘中央部の築成状況は確認することができた。

墳頂より20cmは表土となっており、黄灰色土層を為しており、周辺の地表面と軌を一にしている。表土下より42~43cmは有機質黒色土層を為し、これは全くの盛り土である。その直下は黄色粘土質層を形成しているが、これも盛り土である。

外表及び露呈部分、及び盜掘坑内の層序からして、地山から60cm以上の黄色粘土質の土壤を積みあげ、その上に黒色有機質土を約40cm積みあげて封土を形成したものと解釈される。

ただ、封土形成の詳細な工程については、現段階ではつまびらかにしがたい。



第5図 内部主体の状況（盜掘坑）

2 外部施設

(1) 莢石（図版8）（第3図）

踏査の当初より、墳丘周辺に握りこぶし大の割り石又は塊石が多数散在することが注意されていたのであるが、通常の躑躅に似ず小形である点と、盜掘によって礫床のようなものが完全に破壊された結果によるものか判然としなかったために躑躅と断定するには若干ためら

いがあった。

しかし、盗掘坑の清掃の結果、内部主体にこの種の石材が使用された形跡がなく、また、葺石としての石材の大きさについても、同類のものが各地に存在していることが徐々に判明していること、および、小形円墳に、後述するように木棺直葬の形をとるものについてはしばしば葺石をも伴う現象が、たとえば岡山県や愛知県に見られることが指摘されるにおよび、本墳にあっても類似の現象を考慮し、散布状況にある礫塊を葺石と断定した。

こうした葺石の存在は、岩子山古墳群においては本古墳にのみ見られることであって、2号墳以下については礫石の散在はみられない。尤も、この点については、第1号墳の崩れが著しいため露呈し、2号墳以下は表土におおわれて表面化していないのではないかと疑われるくらいがないでもないが、少くとも数次にわたる表面観察による限り上述の結論を導かざるを得ない。

葺石の置かれた状況は墳丘のくずれが激しいため推察することが不能であるが、現状では南麓、それも東に偏在して多く散布し、面積も大きく、西側は急斜面によるせいかほとんどみられず、北側は墳丘直下にわずかに存在するにすぎない。南側は広い面積にわたってはいるが遺存の数は僅少である。

なお、石材はすべて、岩子山各処に露頭をみせる安山岩によっており、割石である。因みに、岩子山山頂より北に降った中腹は、発見当時、礫石採取のための石取り作業が行なわれており、見事な柱状節理を持った岩盤が露されていた。

(2) 造り出し

墳丘に関する項目で触れたので、ここでは「造り出し」またはそれに準ずるもののが存在した可能性が高いことを示唆するにとどめる。

なお、このことについては、次項の埴輪出土状態においても記載するところであるが、南麓における埴輪検出の状況は、第6図に見る如く、出土の集中の仕方が東南部位は墳丘をめぐるかに見えるが、その後南方に向って直線的に伸びる傾向があり、造り出しに沿った配列が為されたとの推測を可能とする。

しかし、造り出しの存在は推定し得ても、全面的な発掘を行っていないためにその規模なり形状なりについて考察する手がかりは現在皆無に等しい。

(3) 墓輪列（第6図）

形象埴輪・円筒埴輪を含めて、墳丘南麓からは極めて多くのものが出土した。

配列の状況については、検出の埴輪の殆んどすべてが細片であり、本来の位置において検出されたと推定されるようなものは皆無であるため詳らかにし得ない。

ただ、先頃述べたように、細片とは言え検出の状況は、全般にわたって見出されるというわけではなく一定の列状に検出される特徴がみられることによって、おそらくは墳麓を囲んでいたであろうことが推察されると同時に、朝顔形埴輪円筒、須恵質埴輪円筒、及び人物

・馬・不明四足獸等の形象埴輪は、墳麓でも真南に位置する地点に密集して検出されており、丁度造り出しの部位にあたると想定しうる点に分布の中心が認められることは注目したい。

なお、墳丘東方・西方・及び北方においても表面採集ではあるが若干の小片を得ており、この方面にも樹立されてあった可能性が考えられ、稠密さの程度は判らないが、一応墳丘を廻わるようにし、南方の造り出し部に形象埴輪を中心とする特殊な埴輪を樹立したかと思われる。

しかし、今までの数次の踏査にも拘わらず墳頂部よりは何らかの破片も得ることができずにいるため、墳頂部またはその周辺には樹立されることはなかったかと思われる。

同様に、墳丘中段部に関しても、墳丘の高さが、現在若干削平され低くなっているとは言え、本来さほどの高さを持っていたとも思えず、段築の痕跡も全くないため、埴輪の配置、特に円筒埴輪の配置はなかったものと推察する。

IV 内部主体

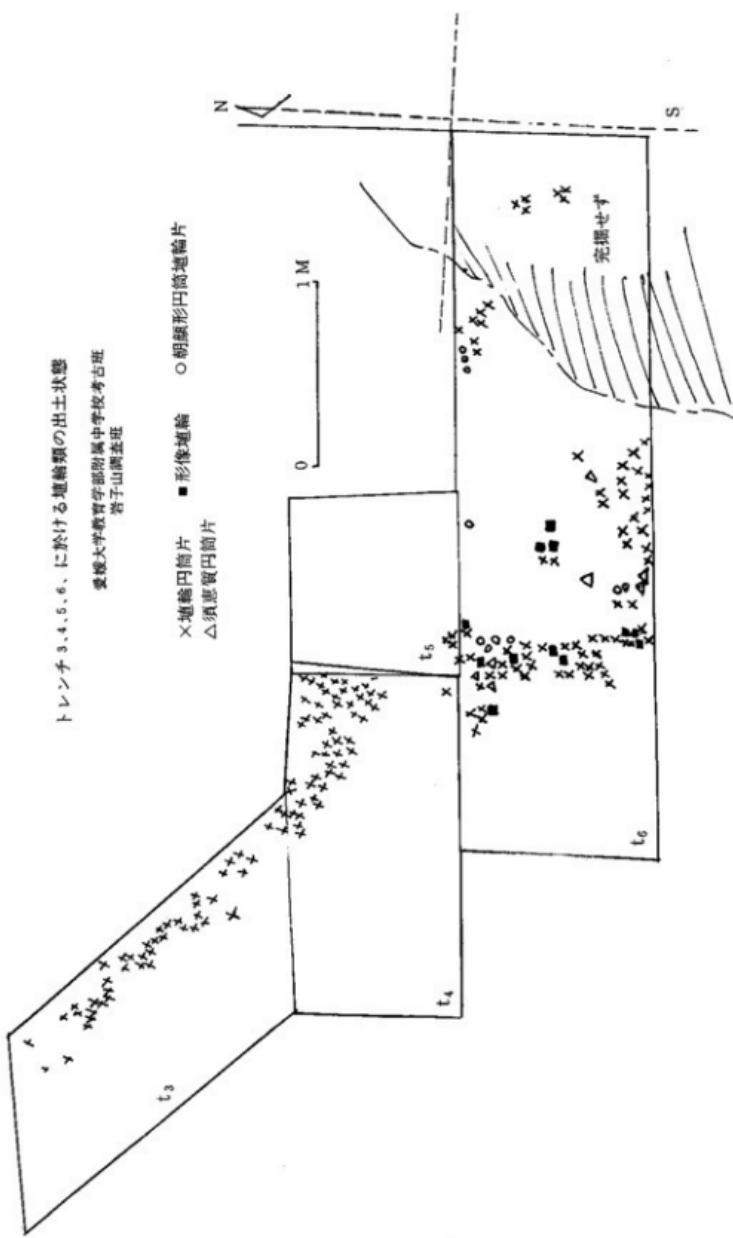
1 内部主体の推定

盗掘坑の清掃に際して、内部主体と想定される周辺から遺物の検出をみているので、未発掘の状況にはあるが、推測可能な範囲で、内部主体の構造を考察しておくこととする。

盗掘坑の清掃にあたっては封土に2、3潜在したかと思われる葺石と同質同大のこぶし大の塊石以外石材らしいものは検出していない。従って、通有の後期古墳のような横穴式石室及び箱式石棺の類の存在は否定される。と同時に、前章墳丘の項で説明したように、盜掘坑底が略棺床にあたると想定され、それと同質の黄色粘土層が、墳丘南麓の造り出しと考えられるところにも露呈していることから、これが粘土構であろうと推定するにも難点があるかに思われる。なぜならば、この主体部下の黄色粘土質層は、おそらく、地山の上に墳丘を築成した際の第1次の盛土を為すものであって、したがって造り出しと推定される部位まで連続した基盤となっていると推察されるからである。主体部の安置は、この黄色粘土質層の上に為されたものと思われるが、その細部の状況については、従来までに集められた資料はすべて、いわば間接的なものであって確実な判断を下す為には直接的な発掘による他はないであろうが、最も可能性のある見方としては、この当時なおさかんであった木棺直葬の形式を考えるのが無難であろうかと思われる。

なお、木棺直葬を考慮し、棺底が最終の盛土と異って第1次又は第2次の盛土の上に安置され、さらに周辺を覆ってゆく方法は蒜山原四つ塚第13号墳A主体に類似しているが、本墳

第6図 地輪検出状況（昭和30年6月）



も、盛土完成後に土塙を掘り、木棺を安置したものでないらしいと思われるが、根拠はない。ただ結果として、盛土の第1段目又は2段目に接して木棺が安置された点のみが四つ塚13号墳に類似し、例えば、三重県メクサ4号墳、同カリコ古墳第1主体等のように最終盛土内に木棺痕跡がみられるものとは明らかに類別しうるものである。^{註27}^{註28}

さて、内部主体が木棺直葬の形式であった場合であるが、棺底の遺物の残存の状況からみて、底面は平坦であると推定されるため、一応箱形本棺状のものを考うべきであろうが、盜掘塙の範囲はそれを推定するに充分でないため、その可能性のあるということを示唆するにとどめておきたい。

内部主体の方位についても明言し得ないが、素環頭太刀の拾得状況が、丁度造り出しと考えられるものに対し直角を為している。刀剣類の検出に際しては、いくつかの例外もあるが、概ね棺身と平行の事例が多いため、それに従うならば、頭位・足位の位置は不明であるにせよ、一応東西方向が棺身の方向で、造り出しに対して直角を為すかと考えられる。これに関しては、齊藤忠博士の論考があつて、組合式箱形石棺、竪穴式石室、粘土施設、礎施設等の原始的な内部構造主体を持つものでは約50%に近い例が遺体埋葬設備を東西におき、頭位を東におくことが多いとされている点、本墳と規を一にするところがあり、さらに頭足の位置についても、上記の推測がゆるされるならば環頭の位置が大体頭位に並行する例の多いことからして、棺身を東西におき、さらに頭位は東にあったとする推論に論拠なしとせず、興味深く覚えるものである。

V 岩子山古墳の副葬品

1 内部主体周辺の遺物出土状態

盜掘塙内清掃以前に、主要な遺物は発見者である森棟正氏によって取り上げられていたが、発見後の措置が早かったために、旧態に復することが可能であった。ただし、一部のガラス玉については盜掘の際にかき出されたと思われる黒色土を、ふるいにかけることによって検出したものであるが、同類のものの発見が塙内にあったために、ほぼ同位置に存在したものと推定してよいであろう。

盜掘塙は墳丘主軸にはほぼ沿った形に穿かれており、巾約70cm、長さ約2m弱であるが、大小2個の穴があり、両者が地表下で合し、あたかもトンネル状を呈していた。（第5図）

坑底は黄色粘土質層に及んでいた。検出された遺物は、すべて坑底に接する位置にはあったが、その上層の黒色土層の最下部に存し、黄色粘土質層に埋まった形や、それに直接接し

たものは皆無であった。

坑底部北端近くに、まず素環頭太刀が、尖先を西に向け、刃を北に向かって形で、水平に存していた。環頭及び刀身は発見当初より分断していたが、接続した形で発見されたため、容易に同一個体としてあったものと考えることができる。

さらに、素環頭太刀に接する如く、北寄りに円板形をした結晶片岩3個が、あたかも鏡鑑のようなかたちで端部を相接して存し、同様に石錐様の石製品2個が、尖端を東に向かって並存していた。これらのものをすべて遺物と呼び得るか否かについては、後述するつもりであるが、石材がすべて近隣に存せず、又錐形のものについては明らかに加工痕が認められるため、「遺物」と判断しておきたい。

素環頭太刀の南側には、刀身中央より10cmばかり離れてガラス製小玉の一群があり、部分的にはそれと重なりながら南方に向かってガラス製丸玉の一群が、いずれも散在した形で見受けられた。この部分については先述のとうりガラス製丸玉の一部が墳頂のかき出された土に混じて発見されているため、擾乱があったものと想定せざるを得ないが、その割には、小玉、丸玉の配列位置が比較的明瞭である点不幸中の幸というべきであろうか。

主体部と思われるあたりで掘られた盜掘坑の残存遺物は以上のものに尽きるわけであるが、石製品かと思われるもの、及び素環頭太刀、ガラス玉等主要な遺物は幸いにも坑底に存したのは、当地方にあっては、内部構造が石室であるのが常であるのに反し、本墳の場合はそれがなかったことにより、盜掘途次において放棄したためではあるまいかと思われる。と同時に、若しそうであれば、遺物についてもほとんど残存しているかと考えられるのだが、いずれにせよこうした点については推測の域を出るものではない。

2 遺物各説

(1) 鉄製素環頭太刀（第7図）

前期古墳出土品通有のものであるが、一般に内反り傾向が多いに反し、本墳出土のものはその趣きがほとんどなく直刀に近い。出土当初より茎の一部を欠いているがその他は完存していた。しかし、現在では鋒のため、ほとんど原形をとどめていない。

環頭部分 長径外寸4.3cm 内寸2.5cm

短径外寸3.5cm 内寸1.8cm

環頭断面 長方形に近い梢円形を為す。径は約1cm。

共造りの茎は2.8cm残存しております、以下は折損した形跡が明らかであった。

刀身部には僅に茎の痕跡を残したあと刃関が明瞭に見られ以下刀身はほんのわずかに内反りの傾向を見せながら鉢にいたる。鉢の形制はふくらつきである。刀背は平背。平造りである。

残存茎部 約0.5cm 身巾 2.7cm

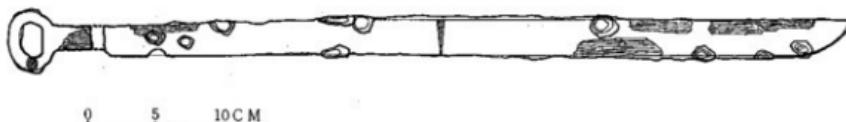
刀身長 54.5cm 背巾 0.5cm

全体に造りは、この種の太刀としては小ぶりな方である。茎の一部、刀身の一部にそれぞれ木部の存した痕がみられること図示の通りである。

この種の太刀は、かつて末永雅雄博士が古式墳より出土が多いことを指摘され、後小林行雄博士も各種の資料を整理された結果、副葬の行なわれた時期の中心を西暦400年前後に位置づけられた。^{註30} 最近では大和・池ノ内7号墳東棺より出土した類品をもとに泉森敏氏が類品の出土地名表を作成し、前期末より中期に盛行をみ、漸減しながら6世紀後半をもって消滅するとしている。^{註31}

道後平野周辺においては、道前平野唐古台遺跡群中の第14号丘より鏡盤・玉類と伴出していいる例がある。身長は60cmをきり本墳出土品に近く、環頭部分の大きさも近いが身巾、背巾共に大きく本例を上回り豪壮であることが異っている。近隣では御幸寺山からの出土がある。^{註32}

いずれにしても四国では本墳出土品と唐古台14号丘出土品の3例があるだけで貴重な資料



第7図 素環頭太刀

ではあるが、残念なことに銹化が甚しく、昨年、愛媛大学附属中学校を訪れ、現品に接した際には、環頭をわずかに残して解体してしまっていた。

(2) ガラス製玉類（図版9）（第8図）

盗掘坑内外から採集した玉類はすべてガラス製であり、形態及び色彩から類別すれば5種に分つことができる。

1	緋色（コバルト色）	丸玉	39個
2	緑色（色はうすい）	小玉（大）	4個
3	紺色	小玉（小）	2個（うち1個は破片）
4	薄青色	小玉（小）	13個
5	黄緑色	小玉（小）	21個
計			79個

この類別はあく迄便宜的なものであり、コバルト色丸玉としたのは径7mm以上のものを呼び、小玉は概ね4mm以下のものを称したに過ぎない。

発見当初は總体79個みられたのであるが、後、各地の展覧会に出されたり、保管場所が移

動したりして散佚してしまい、現在仔細に観察しうるのは、筆者の手元にサンプルとして留めおいた丸玉10個のみである。

（なお、計測表に掲げた小玉については、発見当初、概報を出した旧版「岩子山古墳」愛媛大学教育学部附属中学校考古学班記載の際測定したものではあるが、精度は正しい。）

計測は $\frac{1}{20}$ mmまで測定可能のノギスを使用したが、小数点以下第2位は四捨五入した。

計測結果は表に示す通りであるが、外径平均7.9mm厚5.5mmで、径がすべての個体において厚さを上まわっている。

孔口のある面は平坦に仕上げられてあるが、中には凹面を形成するものも見られ、仕上げの際に単に平坦な砥石で磨いたものとばかりは推察されないものもある。

表面は光沢があって風化の痕をみず、孔内も滑らかである。

気泡が多くみられるが、ほとんど孔口に向って伸長した形をとり、小田幸子氏の推定を借用すれば、ガラス管を輪切りにして成形加工したものかと思われる。それを裏付けるかのように形状はいびつで、2~3回の圧痕を加えて切断したことを見せるような断面三角形状のものも見かけられる。

色調はいわゆるコバルト色であるが、マンセル値は5PB $\frac{4}{10}$ ~5PB $\frac{4}{10}$ である。

化学的成分については、蛍光X線装置を使用した結果、

主成分（軽元素） K, Ca

中間成分 Fe, Ti

微量成分 Mn, Pb, Cu, Co

となっており、カリウムを主としたアルカリ石灰ガラスであり、着色成分としては銅、コバルト、鉛も対象とされようが、コバルトの発色性が極めて強いことからすれば、これが紺色発色の主要成分であるとしたい。

表 I ガラス製丸玉・小玉計測表

岩子山古墳出土のガラス製丸玉は、外見上は極めて平凡通有のものであるが、成分については興味ある事実を呈供してくれる。

一般的に言って、ガラス成分の分析が為された例は非常に少ないのであるが、アルカリ石灰ガラス製丸玉の中にあっても、カリ(K)を主成分とした例は千葉県小田部古墳、三重県上

丸玉計測表

No	外径	厚	孔径
1	8.6	5.0	2.2
2	8.4	6.5	2.0
3	8.4	4.9	2.3
4	8.3	6.6	2.1
5	8.0	5.2	2.4
6	7.8	4.8	2.1
7	7.6	5.0	2.1
8	7.3	6.2	1.8
9	7.3	5.5	2.3
10	7.3	5.2	2.4
平均	7.9	5.5	2.2

単位mm

小玉計測表

No	外径	厚	孔径
1	4.3	2.6	0.6
2	4.0	2.2	1.4
3	3.6	2.2	1.2
4	3.1	2.1	1.0
5	2.7	3.5	0.9
6	2.7	2.4	1.1
7	2.7	2.0	0.8
8	2.5	2.3	0.9
9	2.5	2.0	1.0
10	2.4	1.8	0.8
11	2.1	2.4	0.7
12	2.1	1.9	1.0
13	2.0	2.4	0.5
14	1.9	1.8	0.9
15	1.7	1.7	0.7
16	1.7	1.6	0.6
平均	2.6	2.2	0.9

野市石山古墳、奈良県新沢千塚126号墳の3例が明らかにあり、又発色剤としてコバルトを使用した例は小田部古墳と新沢千塚中の第126号墳があげられるのみである。このうち小田部古墳のものに大きさ、形状とも近似している点は注目してよいかと思われるが、この種の遺物は後期古墳に通有のものであり、成分の分析が広汎に行なわれていない今日ではそれ以上のことは言い得ない。^{註35}

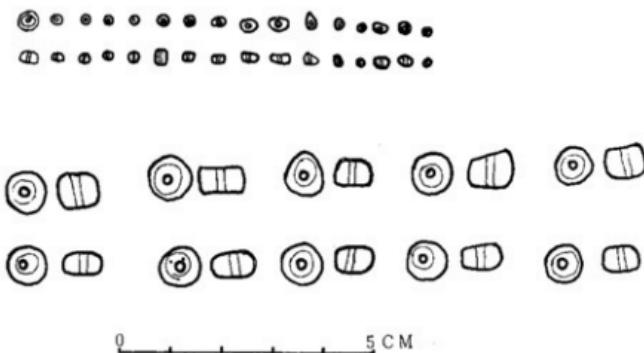
岩子山古墳の場合は単に盗掘坑の清掃を行なって得た個体数であり、実際に発掘を行った場合は、より多くの資料を得ることであろうし、本来どの程度の数量が埋納されていたかも明らかではない。

この種の丸玉を色調、形状の類似点から近隣に求めるならば三島神社古墳において128個の出土を見、新居浜市金子山古墳では略同様のものが900個以上出土しており、まとまった形で出土する例が多い点からもそのことが首肯されよう。^{註36}

(3) 石製模造品 (第9図) (図版11・12)

円板形のものといわゆる刺形のものと2種存在したが、円板形のものは発見直後に現地で盗難にあい、実測図その他の資料もないまま現在に至っている。

発見者の森棟氏及び筆者ら当時の愛媛大学附属中学校の考古学クラブ員数名の記憶による



第8図 ガラス製玉類実測図

限り、すべて結晶片岩製の暗い緑色をした材質よりなり、厚さ0.5cm、径10~15cmの加工痕を何ら残さない円板形のものが4枚、坑底の東西に並置されていたもので、模造鏡かとも思えるが、それにしては形も大きく、細部を検討できない今、これ以上を触れることができないのが残念である。

A 刺形石製品

一見、大型石鏡の観を呈し、造りも打製痕をその儘残し、磨り上げた形跡も認められないでの、一般の石製模造品として扱うことにはためらいを残す。しかし、管見による限り類品

を見出しえないため、石製模造品として認め
ておきたい。

石製模造品とした場合、鎌形品として判別
も可能なわけであるが、古く高橋健自博士も
指摘されたように、この種のものは例えば碧
玉製品のような謂ゆる石製鎌に限っては鎌と
して扱い得るも、一般の模造品としては剣形
と認めるべきであるとされて後、それに対する
^{註37}従うべき反論もない点から、本品も一応剣
形石製品としておきたい。

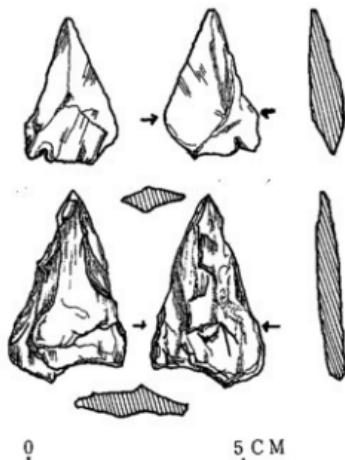
2種あって、大は石墨片岩製で、片面には
打製痕が残り、調整を加えた形跡が明らかで
ある。長4.5cm、基部巾2.6cm、色調は銀色を
呈した美麗なものである。

小は結晶片岩製で、やや暗い灰緑色を呈する。長3.5cm、基部に近い最大巾2.3cm。基部端
の片隅に穿孔しようとして破碎した痕跡が見られる他は、単に石材を打ち割って造ったもの
としか思えない。磨り上げた形跡は全く認められない。

しかし、大小双方共に片面（小は両面の可能性もある）に鎌を造り出したと思われる形跡
があり、大場磐雄・樺山林蔵氏が入山峰の出土品を分類した際の方法に従えば、B型片面鎌
^{註38}の形制を比較的よく残していると言え得る。

本墳より出土した石製品については、通例の石製模造品の材質が、いわゆる滑石であるの
と異り、片岩質のものである点、さらに、加工痕が極めて少く、打ち割った形の儘であった
り、打製痕をその儘残したり、さらには円板形のものについては、全く何等手を加えていな
い点などから、果してどのような判断を下してよいか、極端に言えば遺物として認めてよい
か否かについてすらとまどいを覚えるのであったが、使用された石材が近隣に産するもので
はないこと、及び発見位置が素環頭太刀に接し、人為的に配列されたと思われる点から、類
品を求める限り石製模造品の一種と判断される。

もっとも、剣形品のみであれば、和泉黄金塚西櫛より刀剣に接した状態で安山岩製の石鎌
が出土した例があり、藤山原四ツ塚13号墳B主体上部で他の副葬品と同一レベルで検出され
^{註39}たchipping痕を持つ黒曜石片などのように正体不明ながらも類例の全くないわけではない石
^{註40}製品と考えることも可能であるが、円板形石製品も加工痕なく、やや大きすぎるくらいがあ
るとは言え人為的な配列がみられる点、形が非常にそろっている点から、模造品中にみられる
円板形石製品に類したものと考え、さらに、鏡と剣との模造品のセットとして把えた場合、
石製模造品として処理する妥当性が大きいと考え、この2者を各々円板形石製品、剣形石製



第9図 石製模造品

品と断じたわけである。

近くに石製模造品の例を求める場合、三島神社古墳より円板形石製品があり、離れて川之江市お姫山古墳より滑石製紡錘車があるほか県内古墳での出土例はない。^{註41}

なお、古墳以外の遺跡からは、道後平野でも子持勾玉の出土例があつて古くより知られたものもあるが、一般に西日本に剣形石製品は少いと言われるように、少なくとも古墳出土例について瀬戸内地域に例を知らない。^{註42}^{註43}^{註44}

VI 墳丘外表の遺物

内部主体に伴わないものとしては、墳麓南部より出土した埴輪類と、墳丘上で採集した須恵器片がある。

1 墓輪類の出土状態

当時の状況を記録したものとしては、資料が散佚していることもあって、第5図及び表紙掲載図版のみであるため、筆者の記憶と照合しながら記述を進めたい。

墳麓南部外表には極めて多数の埴輪円筒片が散乱していたため、これを記録にとどめながら採集につとめると同時に、深さ30cm（第6図）で墳麓南西部には、墳丘をとり巻くように帯状に埴輪円筒破片が、まき散らされたような形で検出され、南部に至るに従って検出密度は次第に濃くなり、T5区よりT6区にかけて、検出される埴輪片は直線的に南方に向って伸びる。特にT6-T5間では馬形埴輪片及び不明の形象埴輪片が混在して、そのほか須恵質の円筒片を見る。同時に朝顔形円筒片も混じる。T6南端では発見の密度は東方に向って伸び、あたかも造り出し部をとり囲むか又はその上に存在したかのような形状をみせる。東方に向った埴輪群は、不明形象埴輪細片を若干まじえながら再度土師質埴輪円筒片が多くなり、T6東部は堅い地山となって表土につながり、若干の表面採集の土師質埴輪円筒が残るのみとなる。

この間T6中央部、いわば造り出し部の中央部で、人物埴輪洞部の余り破損のないものと、馬形埴輪の口部片がほぼ接した形で一部を地表に露呈して検出された。同時に、若干離れて不明の四足獣の埴輪が大きく5片に分かれて見出された。T6東部北方では再び朝顔形埴輪円筒片が検出されたが、これは西部で発見された個体とは全く異なるものであった。

なお、T4・T5・T6の接したあたりに散在した須恵質埴輪円筒は一個体分で後に接合可能であったが、T6南部より出土した須恵質埴輪円筒は、また違った1個体に接合された。

2 円筒埴輪（第10図）

大きく二種に分つことができる。

(1) 須恵質円筒埴輪（第10図-2）

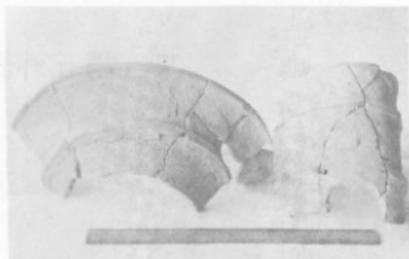
灰白色を呈し、焼成は全く須恵器と等しいが、若干あまい。

口縁端部は指頭による横ナデ手法によっており凹線状となるが、条痕は残さない。

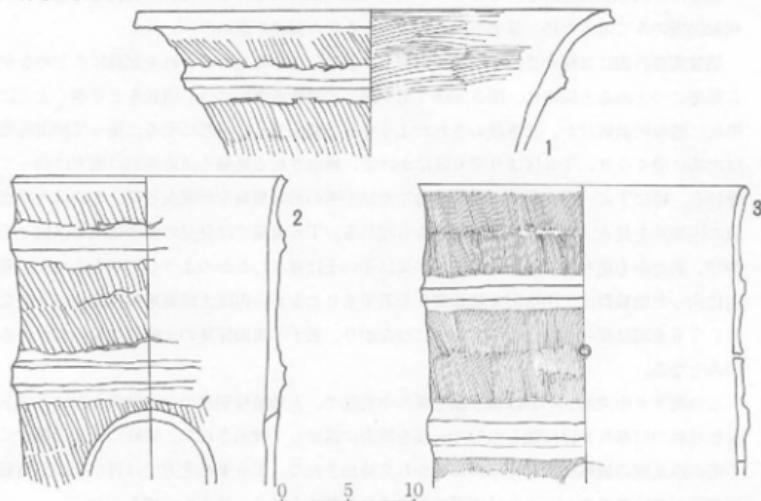
口縁部は内外面共に丁寧な横ナデを行い、体部は外面は刷毛目仕上げ、内面は輪積み痕を残さない程たんねんに器壁の凸凹を、おそらくは指によって平滑化を行っている。

体部外面の刷毛目は右下りの方向に上から下に向って行われるが、特徴的であるのは上下の動作を5cmに1回位とめて横に廻しながら行ったと推定され、一周又はある一定間隔をおく毎に更に一段下の刷毛目調整を行ったと思われる点にある。

刷毛目による調整の終ったあと、粘土紐



（写真5）
円筒埴輪



第10図 円筒埴輪
を貼りつけてタガを形成するが、この際横ナデによって調整するも充分でなく、次に述べる

土師質円筒の場合、横ナデ調整によってタガ上下に凹線ができるのに反し、須恵質円筒にあっては凹線は顕著でなく、あたかも、先に粘土紐を帶状に造っておいて、円筒に貼りつけたかと思われる程であり、あるいはそうであるかも知れない。

刷毛目は極めて粗であり、3cm方に3～4本である。

現存部分からはタガの本数は2本は明瞭に認められるが下半部の破片が全く見あたらないため絶体の高さ及びタガが本来何本あったかは明らかでない。

タガ2段目下部に円孔がみられるが、鋭利な工具で切り取ったと思われ、円筒内部より外部にラッパ状に開いている。

個体数としては2個体は確実に存するが、他に余り破片がみられない点からすると、本来少なかったものと思われる。

(2) 土師質円筒埴輪

検出された破片の殆んどが土師質のものであるが、製作手法はほぼ同一である。

口縁端部は円みを帯び稜はみられない。口縁部内外面ともに横ナデ手法が明瞭に残るが条痕の如きのものはない。器壁は1cmを超えることなく薄手の造りである。

体部内面は丁寧な調整を行い粘土のつぎ目などは全く残らない。

外面は、きわめて細い刷毛目を残しており密度は3cm四方15～20本も認められる点、須恵質のものと対照的である。刷毛目の方向は縱又は右下がりで、刷毛の走らせ方は5～10cm位を走らせては段落させ、次に同様の動作を行う点入念であり、手法は須恵質に近いと言えるが、なかには一息に20cmから30cmぐらいうらせたものもあるようで、この点については、もう一種別の作成手法も存したかと思われるが明らかではない。

外面刷毛目調整後、粘土紐を貼りつけてタガを形成し、タガの上下には器壁に凹みができる程明瞭な横ナデ痕を残すが条痕はみられない。指頭による横ナデと思われる。タガの断面は一応稜を残してはいるものの高さは余り大きくなく退化した形である。

円孔は上から2段目のタガ直下に認められるものと、2段目のタガを切り込んでつけられたものと2種類見受けられる。全体の造りが終った後切り取られたことを証するものである。

なお、1段目のタガと2段目のタガとの間に7mm径の円孔を貫徹させたものがあるが、何の意味があるかはわからない。類品としては兵庫県池田古墳にも認められる。^{註45}

土師質埴輪円筒は微細な破片が数多く存してはいるが、全体を類推させる資料に乏しく、特に下底部の破片は一片存したのみであって、今それすら散佚し、仔細な検討をほどこし得ないが、手法は殆んどかわるところがない点は注目すべきであろうか。

3 朝顔形円筒埴輪（第10図-1）

製作技法は先述の須恵質円筒埴輪と等しい。即ち、タガの貼り付状態及び刷毛目成形技法、刷毛目の密度共にほぼ同様の状況にあるが、焼成は須恵質ではなく、堅緻ではあっても土師質とすべきである。但し、胎土は良質の粘土であって、明らかに土師質埴輪円筒とは峻別され、むしろ須恵質のものに近く、その意味では、本来須恵質のものであったのが火廻りの加熱でそうなったものかと疑わしめる。

口縁端部は指頭による横ナデが行われ、口縁部内外面共に同様、極めて滑らかな仕上げであるが、横ナデが尽きるあたりより、内面は横方向の刷毛目を残している。刷毛目密度は内外面共に同一であるため、同一工具を使用したものかと思われる。

朝顔状に開いた個所以下は、それに接続されると思われる破片は見出されていない。

4 形象埴輪

(1) 人物埴輪（図版13）

頭部と脚部を欠き、また両手を失う他は、胴部は完存しており、貴重な遺物と言うべきである。

現存高約38cm、肩部巾18cm、胴部の最狭部巾13cm、裾部巾20cmで、後期古墳出土人物埴輪としては通常の大きさであろう。

全体としては直立した形をとっているが正面より見て右側の手は横に向って突き出した形をとり、左側の手は下方に降りる傾向がうかがえる。胴部構成は全般に簡潔で腋の下にある円孔一対の他は着衣の表現も余りなく、最もくびれた胴部にベルト状に粘土紐を巻いて、正面に短剣状？のものを差した形をとつて、以下、スカート状に裾が広がり、おそらくは円筒埴輪状と思われる台部に続いている。

全体に刷毛目で入念に仕上げられており、横に伸びるかと推定される位置では横方向に腕の付け根、肩のあたりから刷毛目が走り、反対側の腕部では肩より斜め下方向に刷毛目が向う。その他はすべて縱方向に、約10cmぐらいずつ刷毛を上から下に降ろして整形したあと、中央部に太い粘土紐を巻きつけ、その上下を横ナデによって整えている。後、正面と思われ

る方向に巾広い粘土板を「へ」の字状に造って貼りつけてある。短剣かと思われるが、腰に
鎌を差すこともあり断定はできない。

裾部も横ナデによって刷毛目がとり去られ、後一条の沈線が施されている。

この種の沈線はベルト上5cmばかり上位にもみられるが、裾部が鋭く細いのに対し、これは太目である。

いずれの沈線も、とぎれとぎれにあって、たとえば回転台上で本体を廻してつけられたようなものではないであろう。

色調は赤褐色で、焼成は朝顔形円筒と全く同様に豊饒に焼きしまり、須恵質に今一步と言うところである。色調、胎土共に朝顔形円筒に酷似している。

和歌山県井辺八幡山古墳においては、馬に接近して簡素な人物埴輪（同報告書中東人物14号とされたもの）があり、東側及び西側造り出しでも同様の状態であるところから「馬の飼育を扱う人の意味での駆者」かと推定されているが、本墳の人物埴輪の出土位置は馬の頭部、
註46脚部に接しており、やはり同様の意味を持たせててもよいかと考える。

また、井辺八幡山古墳の人物埴輪は、本墳のものと同様に簡素であり、また腋下に円孔を持つ点、単純に裾がスカート状に広がる点、脚台が単なる円筒である点など非常に近似した形制を持っていることは注目してよい。

なお、人物埴輪については、本品と異った個体のものと推定される裾部片が存したが現在不明となっている。同様にスカート状の広がりを持つものであったが、本埴輪より、やや大き目であったと記憶している。焼成、色調共に何等異なるものではなかったことも付しておく。

(2) 馬形埴輪

巻を伴う口鼻部の破片、脚部片、杏葉を伴う尻部あたりの破片、尾部等が出土している。

・巻部（図版14）（第11図）

顎部全体は円筒状に造られ、狭部末端で口鼻を表わす形となっている。鋭利な工具で口を一文字に引き、側面に及んで口を表現し、その上部に竹管様のもので2つの孔を穿って鼻孔を形成している。

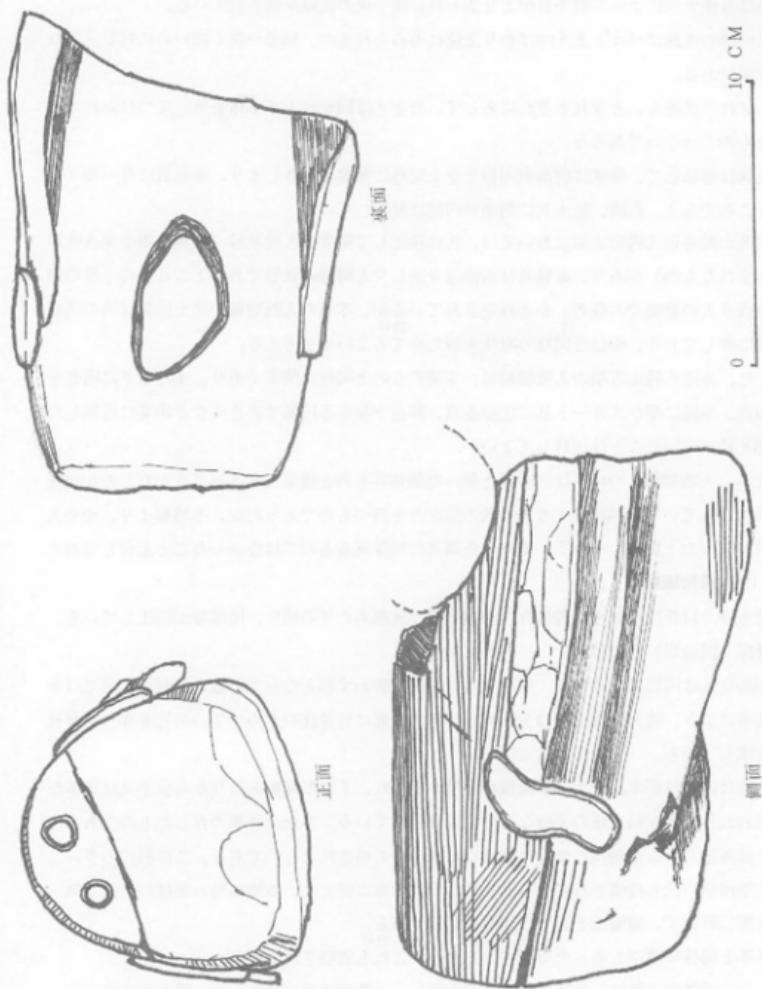
側面には、口部末端にフ字形鏡板の表現がみられ、フ字形鏡板あたりから引手又は頬革かと思われる表現が粘土紐の平板なもので表現されている。本来は鼻革の存したものであろうことは推定されるが剥落したものではなく当初から略されたものである。この形式の多いことは増田精一氏も指摘されている通りで、氏の分類に従えば、本埴輪馬の頭格の形式は第一又は第二形式で、埴輪馬としては通有のものである。
註47

鼻革と同様に顎革もあった可能性があるが、これも省略されている。

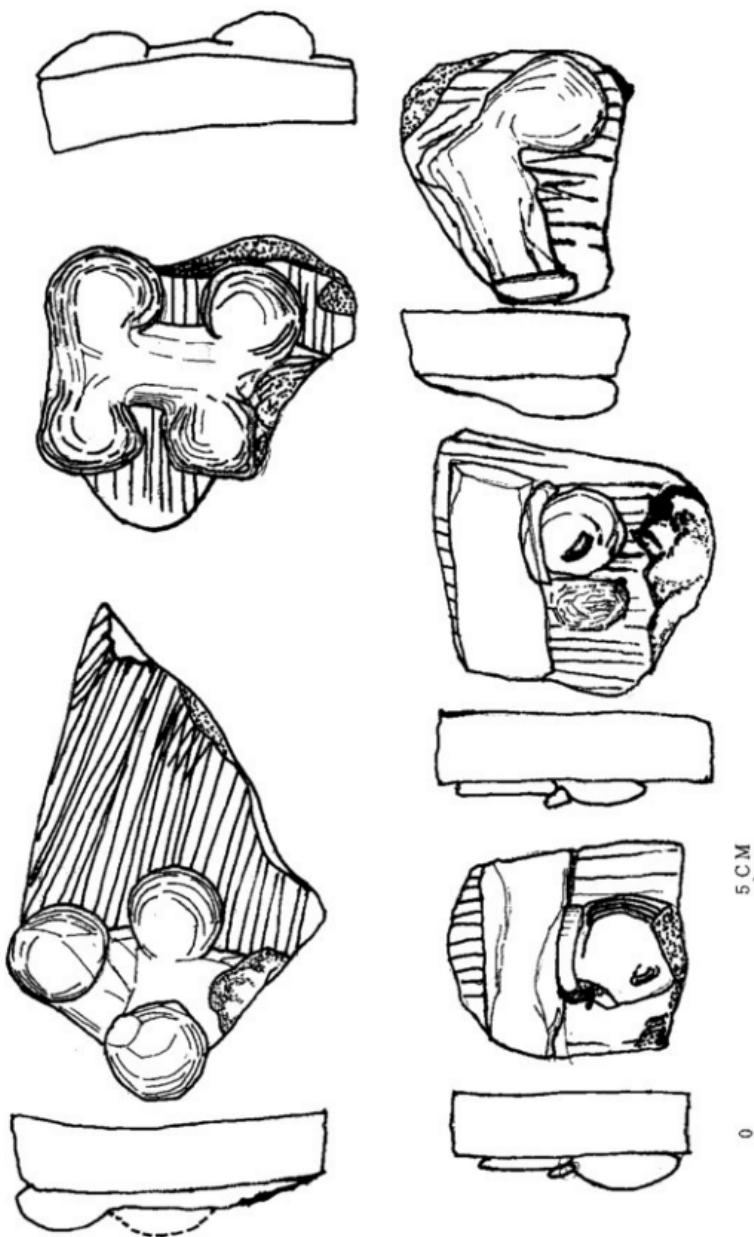
一方、頬革の下部に、やはり鏡板に端を発して一条の隆起が認められ、横ナデ手法によって細い粘土紐で成形されているのは、手綱の表現かと思われる。

・杏葉（図版15）（第12図）

第111圖 墓室馬槽部破片



第12図 地輪馬舌葉部及びその他



いわゆる劍菱形杏葉に鈴を附した形のもので、先端に一つ両側に二つずつ、計5個の鈴をつけたものであって、実物としては愛知県志段味大塚古墳（大塚第1号墳）、京都穀塚古墳^{註48}更に、現在鈴を欠失するも和歌山県大谷古墳の場合は劍部に5個とその上部に2個、計7個^{註49}の鈴を持ってはいるが、類品としてあげることができる。

・脚部（図版16—6）その他

脚部が一本だけ出土している。端末に逆V字状の切り込みがあり、蹄の状況を写実的に表現している。

その他、鈴を附した革帶状の表現をとるもののが2、3みられるが、胸繫又は尻繫に関するものと思われる。（図版15）（第12図）

尻尾を表わした破片も1個あるが、これも通有のものである。（図版16—3）

上記のものの他にも馬形埴輪に関係があるかと思われる破片も存在したが、現在、愛媛大学附属中学校にはなくなっている。

これらの馬形埴輪片がすべて同一個体のものであったか否かについては確証は何ひとつない。鼻口部、杏葉を持つ破片は、焼成堅緻で、人物埴輪や朝顔形埴輪に類似するが、その他の破片は胎土は類似しているが焼成は土師質円筒に近いほどあまい。従って別個体の可能性も存するわけであるが、馬形埴輪全体としては相当大型であるため、火廻りが均一であったかどうかわからず、全体の発掘が行われていない今日では2個体以上の可能性もあり得ると言ふにとどめた。

（3）その他の形象埴輪

人物・馬形の他に、現在筆者の手元に残っている写真には、四足獸の埴輪一個体が、胴部のほとんどを完存した形で存在する。写真的状態が極めて悪いため、本報告書に図版を掲載するわけにはゆかず、現品は又10年位前に紛失しているため、簡単な略図を掲載するのみで寛恕願いたい。（第13図）

刷毛目については筆者の覚え書きより、又器形については発見当時の焦点ボケの写真から類推し、大きさについては接近して出土した馬形埴輪杏葉片より推定した。従来四足獸と言えば、猪、鹿、牛等が知られているが、関西、特に瀬戸内地域では余り類例がない。鳥取県に鹿の好例があるも、本品は鹿とは思えず、牛か猪のようなものと推定したいところである。^{註51}

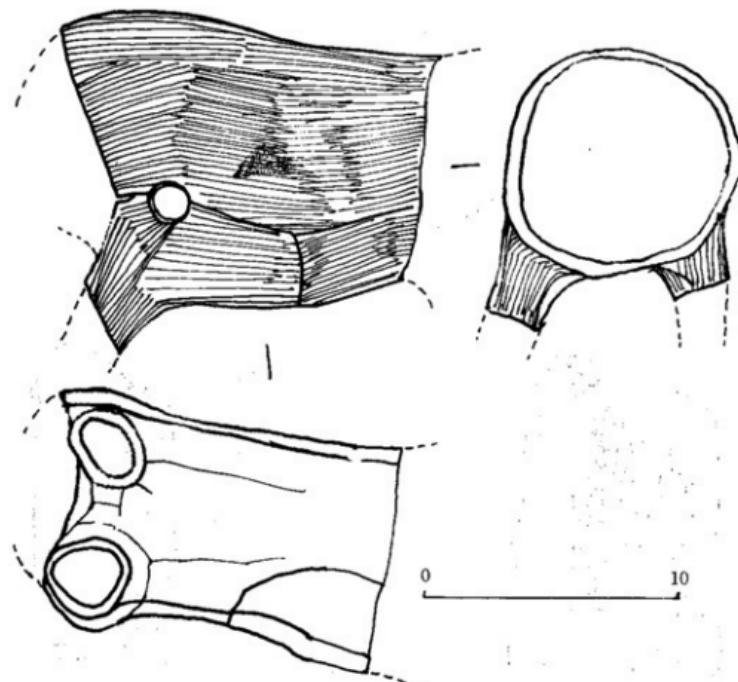
その他、図版16—5に掲げたものは馬形埴輪の鞍の前輪か後輪のようにもとれるが、馬形埴輪の破片のすべては刷毛目仕上げとなっており、この部分だけが指頭又はその他の、例えば皮か衣による指けずり、指ナデ手法によっているため、果してそう断定してよいかどうか問題が残る。なお本品は屈曲部外面端は若干拡張されT字形に近く、内湾部も同様であるが、内側に剥落した形跡もなく、そうした点からも馬形埴輪に附隨するものとは思われない。

他に、筒状を呈した品が2個あるが焼成はよいが本来何を意味したかはわからない。（図版16—1・2）

また、表面に弧線を表わしたもの（第14図）があるが盾形の断片かと思われるが断定は控えたい。焼質悪く土師質円筒に近似するが刷毛目はそれより粗い。また、革帶状埴輪もある。（第15図）

5 墳丘外表より採集した須恵器片について

筆者が踏査した今より約20年以前、須恵器細片は墳丘南麓に細片がみられた。しかし採集することはほとんどなかったとともに調査時に何の検出もなかった。

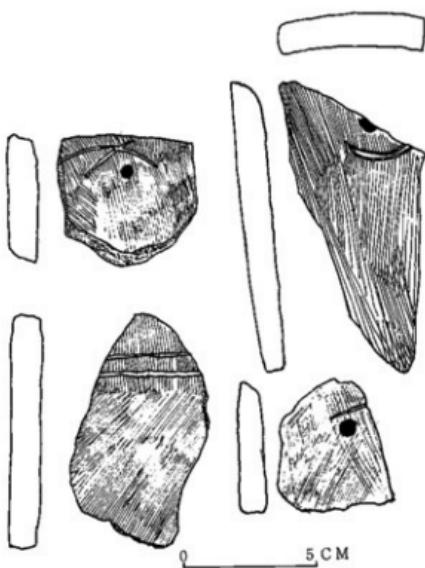


第13図 四足獣埴輪

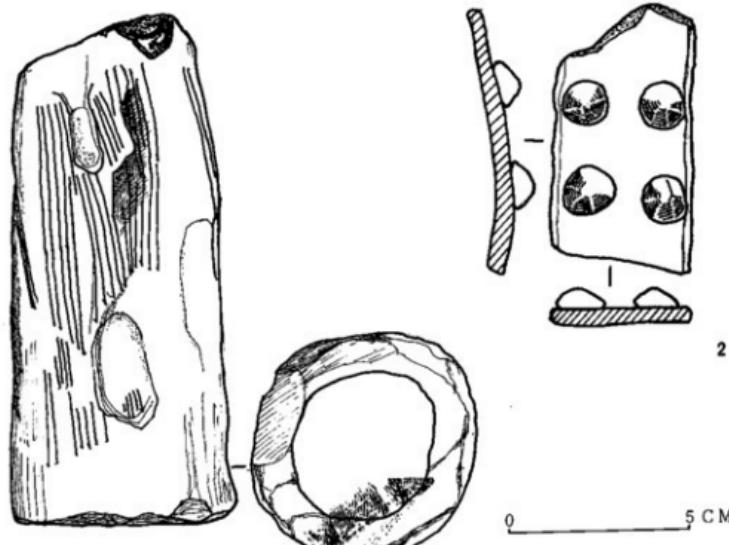
後年、正岡陸夫氏等が墳丘を実測された際に、外表で採集された須恵器断片が2個ある。

(1) 器台脚部片（第16図）（第17図）

採集位置は正確なことはわからないが、南方墳麓とのことである。



第14図 弧線丈入埴輪片



第15図 草帯形埴輪・筒状埴輪

器形は、おそらくは器台と思われるが、子持壺又は子持高環の可能性もなしとしない。

脚端部は、僅かに内方へすぼまり、端末部は凹状をなす。端末より3cmほど上部に、削り出し突帯と思われる二条の鋭い稜線と、その下方に凹線が認められ、その上方約1cmのところに三角形透孔の底辺部と側辺の一部が見出される。

脚端から稜線間に一帯の櫛書き波状文、稜線上方に波状文がみられ、三角形透孔は、櫛書き波状文を切り込んで形成されている。

器壁内外面共、ガラス質自然釉の吹き出し、又はタレが著しく、特に表面では稜線間には凹みを埋める程に濃緑色のそれが認められ、櫛書き波状文は、それがため、拓影に明瞭さを欠くほどである。カキ目は見られない。

色調はやや青みを帯びた灰褐色である。

なお、この破片による推定復元脚端部径は35cmぐらいと思われる。

須恵器編年は当地方においては未だ定まったものはないが、陶邑古窯址群中の編年に従え
ば第I型式～第II型式初頭に比定しうるかと思われる。
註52

(2) 壊片

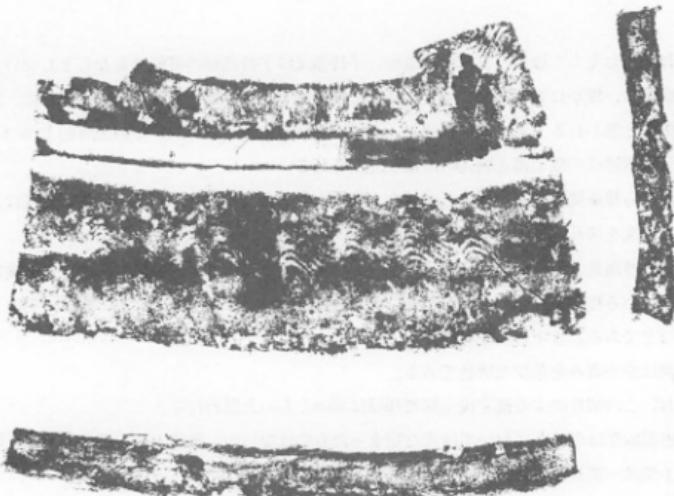
微細な破片であるため観察を充分に行はれないと、口縁端に稜は認められず、やや内傾の翫を持ち、口径は推定復元約10cmう考えられる。第II型式群に含まれるかと思われるが明らかではない。

器体が小形である点、古制を残しているかに見えるが、口縁端に稜を持たぬ点、やや内傾する点、古くても6C前葉以前に潮ることはできまいと思われる。

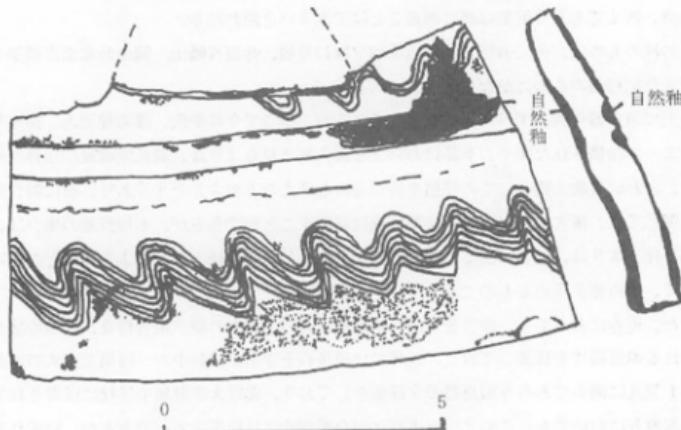
この種のものは、再三引用した蒜山原四ツ塚13号墳、井辺八幡山、岡山県北山古墳第1号墳等6世紀初頭のものにかなり普偏的である。

以上の須恵器片共、すべて表面採集品であるが、かつて今井亮氏、渡辺健治氏、神原英郎氏によって指摘された如く、^{註53} 本品においても混入品と見るよりは、墳丘完成後の送葬祭祀に伴う、言わば供獻土器としての性格を持つものと考えた方がよさそうであり、特に器台型土器に関しては、横穴式石室の場合は石室内に見出すことができるが、木棺直葬の場合は、主体部に伴うよりは、外表に樹てられた類例が多く、又、住居址よりの出土も殆んどないのであって、その感を深めるものである。

また、近在にあっても、伊予金子山古墳墳蓋において踏査の際、筆者自身、大型の襲かと思われる須恵器片を探集しており、近郊では道後石手寺山古墳群中の一円墳で古式の器台片と第I型式に潮るであろう須恵器壺を探集をしており、愛媛大学附属小学校に保管されてある。本地方においても、このような事例は割合普偏的に見出すことができるが、いずれも5世紀末～6世紀初頭と思われる点は注目すべきかと思う。



第16図 器台形土器脚部拓影



第17図 器台脚部片実測図

VII 岩子山古墳の築造年代

岩子山古墳の築造年代の考定については、さまざまな要素がからみ合っているために、そのひとつひとつを解きほぐしてゆかねば解決を得ることができない。

まず、遺物の面からであるが、素環頭太刀に関しては、古く木永雅雄博士も古式古墳に通有のものとされ、後、小林行雄博士は、西暦400年を前後とする時期に埋納の中心をおされたように、概して前期古墳に割合普偏的な遺物であるが、例えは最近でも兵庫県姫路市宮山古墳の第一主体から検出され、^{註54} 5世紀後半にも埋納が行われ、備前邑久町我城山6号墳のように、横穴式石室採用直前の時期の古墳からの出土もあり、奈良県岡峯古墳の如きは6世紀末と推定されている。

従って、この型式の太刀の盛行が古墳時代前期末から中期に盛行をみるものではあっても、岩子山古墳の年代想定の決定的なメルクールとはなり得ない。

また、石製模造品について言えば、かつて小林行雄博士は、中期古墳の様式のひとつとして考察されたのであるが、この場合、種類・形制共に整ったものであり、特に本墳出土例は特異なものであるだけに、適用するわけにはゆかない。^{註55}

本墳出土例は、中期以降も連綿と存続した祭祀遺跡によく見られる円板形石製品、剣形石製品に共通の趣きが見られ、そうであれば中期古墳に副葬されたおびただしい数の模造品とは又異った意義を見出すと同時に、年代の巾も後期末に至るまで拡張してからねばならない。このことは古墳出土例でも同様である。

例えは、円板形石製品については、形制は異なるも6世紀中葉の築造と推定される松山市三島神社古墳からの出土もあり、これは近くの例として注目すべきであると共に、中期古墳としては岡山県隨庵古墳例も、唐突な出土状況は三島神社に共通のものがある。^{註56}

こうした中で比較的年代推定の資料となるのは埴輪である。本墳で検出された馬形埴輪片は細片が多いにもかかわらず飾馬としての装具が多く表現され、且写実的である。いま、この点に着目して、埴輪にあらわされた馬装具を、馬具の編年と対照して、本古墳の築造年代を考察してみたい。

ただし、これに関しては二つの前提となる条件を附しておく。

まず第一は、埴輪が、本古墳の築造と同時に樹てられたものであること。第二に埴輪に写された馬装の形式は、必ずしも埴輪作成時における馬装そのものでなく、埴輪工人の記憶の中に存したものであるかも知れず、したがって、本古墳出土の馬形埴輪に表わされた装備の形制は、馬装の形制の実年代を忠実に反映したものであるかどうかは分明でないため、本墳造営の上限の時期を示すことはあっても下限とはなり得ないこと。の二点があらかじめ考慮

されておかねばならない。

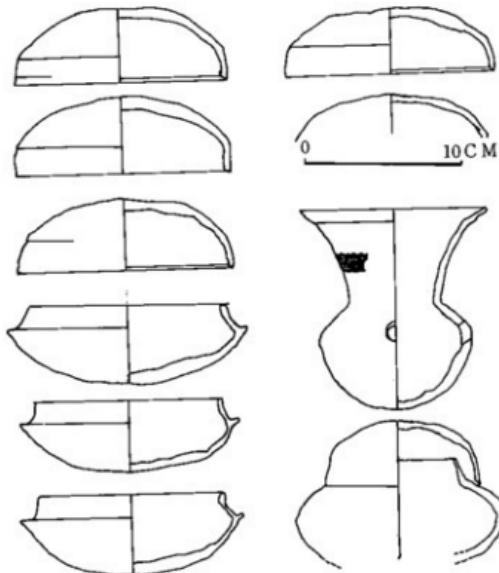
馬具の編年については、かつて小野山節氏の労作があり、これについては管見による限り大きな異論は見出されていないため、装備の編年についてはこれに拠りたい。^{註58}

岩子山古墳の埴輪頭部片には f 字形鏡板と思われる表現がみられること、及び、杏葉の形態は刺菱形鈴付杏葉があって、特に鈴付杏葉には 5 鈴付と考えられるものが見られる。

5 鈴付杏葉については、小野山氏は馬具変遷の第II期にはじまるとされており、鈴杏葉の中にあっては刺菱形の形制をよく残しているものと考えられ、比較的古式のものとされている。他方、実際にこれら 5 鈴式杏葉を出土した古墳は京都府鞍塚、愛知県志段味大塚等 5 世紀末から 6 世紀初頭にかかる古墳に限定的であって、本岩子山古墳の馬形埴輪の上限もその時代において適切かと考えられる。

なお、本岩子山古墳の埴輪馬には 5 鈴付の刺菱形杏葉が認められるが、筆者の管見による限り、この種の杏葉を明らかに付したと思われる馬形埴輪は関西では余り知られていない。

次に、本古墳の上限を一応上のようにおいた場合、下限としては求むべきものが殆んどないが、正岡睦夫氏が埴丘実測に際して拾得した須恵器片を、本古墳に対する供獻土器と解釈した場合、本論で述べたように、須恵器I 期後半にかかるものと解釈されるため 5 世紀末から 6 世紀初頭の年代と考えることが可能となってくる。



第18図 岩子山古墳下方より出土の須恵器（正岡氏による）

このことは更に、正岡氏が岩子山古墳東側下約200米の地点で採集した土器が陶邑古窯址群中のMT15型式に属すと考えられ、特に題は古式である点6世紀中葉の年代を与えてよいと思われる。この壙廻古墳の立地は、岩子山古墳より下位にあって、それ程眺望も利かず、常識的には、占地上、岩子山古墳築造後ある一定の年代を経て構築されたと考えられるから、岩子山古墳の年代は、少くともそれより遡ることが考えられ、前段で述べた結論と矛盾しない。

以上の論述を総合して、岩子山古墳の築成された時期は、5世紀の最末期より6世紀の初頭であると結論づけることができるだろう。

このことはさらに、最近、小円墳における木棺直葬例が次々と見出され、瀬戸内海近傍においても、蒜山原四ツ塚第13号墳及び岡山県北東部に位置する美作町北山古墳群中の第1号墳などは共に円筒埴輪や形象埴輪を有している点で共通すると同時に、ほぼ同一の年代を考註59えられている点からも、本墳の築造年代を想定する上で役立つ。

葺石についても、美作における小形古墳での葺石の終末が5世紀末～6世紀初頭と言う例が津市六ツ塚古墳、沼6号墳等で知られており、最近調査された事例では、やはり岡山県押入飯綱神社古墳群中にも認められている。註60道後平野においても、岩子山古墳に極く近い例で、松山市新浜徳利山古墳で埴輪・葺石の使用があって6世紀初頭かとみられている。註61

これらの諸点は、本墳の築造時期を先に考察したことによって得た結論の傍証として利用することができるであろうし、道後平野と言う地域性を超えて、その年代考定や古墳の在り方が決して特異なものではないことを付言し得る基ともなるであろう。

VIII 岩子山古墳の歴史的意義

岩子山古墳の築造年代を以上のように規定した場合、まず第一に考えられねばならない問題は、道後平野の東北部は別としても、この岩子山古墳周辺には、より遡ると考えられる古墳がみあたらぬことである。註62考古学的には常に新しい発見がつきものであるため、余り断定的な言い方はしたくはないが、現在のところ、この地域の開発は殆んど進んでしまっており、研究者の眼も古くからゆきとぞいて来た地域であったため、著しい墳丘をもった古墳や頗るな遺物を伴った例はないとして過言ではあるまい。従って、本古墳をもって、この道後平野西部における初現の古墳と一応見なしておきたいわけである。

さて、この道後平野西部の地域は、歴史的にみて、極めて重要な地域である。考古学上からは、近年新聞紙上などを賑わした古照遺跡は岩子山古墳の眼下にあり、しかも古照遺跡の評価が未だ定まらぬとは言え、古墳時代初頭前後又はそれ以降の巨大な壙であろうとする推

察はほぼ間違いないと思われ、岩子山古墳が登場した時には、既にこの巨大な遺構は存在しており、本古墳が見おろす一帯はみごとな水田を為していたであろうと考えられる。

同時にまた、岩子山古墳の後背地は、現在正確な位置が不明であると言え、古くより三津と呼ばれ、いわゆる熟田津の石湯に至る経由地であり、近傍のどこかが熟田津であったことは疑いを容れない。古照遺跡と熟田津の名称とを組み合わせるとき、天然の港に近い肥沃な美田地帯を想起させずにはおかないのである。こうした風土的背景は、岩子山古墳が築成された時期には既に存在しており、そうであれば、古照遺跡においてみられた大規模な土木工事は、岩子山古墳の被葬者の一族とは無関係であったとは思われず、むしろ、その父祖の代にあたる時期に、被葬者一族の誰かによって主導し推進されたものと推察してよいもののように思われる。その場合は、岩子山古墳の被葬者は、その工事の主導者—この地域の首長としてもよいであろうが—の直系の子孫として理解するのが、現存する考古学的資料からすれば最も穏当な見方となろう。

古墳が共同体内部の力の充実によって、（又は共同体の崩壊過程で）自然発生的に築成されるとするならば、古照遺跡にみられる大規模な治水工事の主導者が廻した際に、あるいはそれ以前に、既に相応の古墳がこの地域に存在してよい筈であるが、現在のところ先述したようにそれらしきものを見出すことができない。しかしながら、その時代の古墳が存在しないからと言う理由で、この地域における「権力者」が存在しなかったことには到底なり得ないし、むしろ、石手川、重信川の乱流を何らかの形で阻止し、熟田津と称せられるほどに美田化した背景には、弥生後期にはいまだ共同体であった集団を、見事に統率して止揚させた「権力」の姿を古墳時代のはじまりの頃の古照遺跡にみることができるのである。

そうした場合、この権力を保持する首長が何故他の地域にみられるような古墳を形成しなかったかが改めて問題とされねばならないだろう。

古墳発生の論理については、諸先学がさまざまな形で提示されておられるけれども、ここでは、むしろ発生しなかったことの方が大切である。

古墳の築造がひとつの葬制であるという観点に立つ限りにおいては、そして、それが汎日本的でないとするならば、たとえ古墳を築造するだけの財力と権力を保持していたにせよ、在来の、おそらくは弥生時代以来連綿と続いている葬制を改変する必然性はいささかも存在しなかった筈である。

日本全土における古式古墳の数、又は中期古墳の数は、古墳全体の中のほんのひと握りに過ぎないことはよく言わることであるが、その理由を以って、古墳を築造することが可能であった権力保持者が、古墳の基數と等しいというような等式は生れて来はしない。今仮りに、それを認めるとするならば、日本全土にわたって、社会的発展が余程に不均等であったことを認めない限り、古墳の大小の差はあれ古式の古墳のより広汎な展開をみたであろうし、逆に、辺境地域である筈の会津盆地に大塚山古墳が誕生した理由を、他の地域より何らかの
註63

理由にもとづいたすぐれた生産的基盤があったことが説明されねばならない筈である。そうした意味においては、共同体の崩壊は古墳造成の必要条件とはなり得ても充分な条件ではないことを、まず理解しておかねば、各地域における古墳の発現を充分理解することができなくなる恐れがある。そして、これは、後期古墳の展開の場合も、同じく考慮されるべきことのように思われる。

岩子山古墳の造築は後Ⅰ期と推定されるが、その地域の開発は古照遺跡にみる限り4世紀を前後するものであった。そして、該地域では、現在のところ岩子山古墳より遡る古式古墳や中期古墳は認められておらず、おそらくは、社会的な段階は周辺他地域とさして大差なかったと思われるのであるが、古墳——高塚の築造——という葬制は、ようやく後Ⅰ期において発現し、以降、岩子山古墳群中の各古墳や、北山古墳群等の近隣の群集墳が猛烈な勢で築かれてゆくようになるのである。^{註64}

中期古墳造営に関する国家権力の規制については、小野山節氏の論考があつて、そうしたもののが存在を考えようとしており、更に5世紀後葉の段階においても数次の規制があると説かれているのであるが、岩子山古墳が本地域において、はじめて高塚墳として登場した背景には、やはり何等かの外的要因や契機があるようであり、若しそうだとすると、それはやはり中央政権かそれに準ずる何らかの「政治的な要因」を考慮すべきと思われる。

岩子山古墳に関して注目すべき事柄は、まずその墳形が小型の円墳であって小さい造り出し状のものを持ったものであること、及びその造り出し状のものに近接した形で、判明している限りでは人物埴輪・馬形埴輪・不明動物埴輪及び朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪等が整備されていること、又木棺直葬墳であろうかということなどが特色としてあげられる。このうち、まず円筒列や埴輪構成について留意してみたいのであるが、本墳の構成に極めて類似したものに岡山県四ツ塚第13号墳があげられ、こうした点に注目して調査された後期古墳の数が少ないため明言し難いが近藤義郎氏の調べられた範囲では他に岡山県阿哲郡瓢塚、総社市三須の一古墳、赤磐郡丸山古墳などがあげられるようである。（四ツ塚13号墳以外は造出し部があつたか、又は形象埴輪がどの箇所にあつたかは明らかではない）これらの古墳は同氏の推定ではすべて後Ⅰ期又はそれに近いという点でも岩子山古墳に等しく、今調査例は少いけれども、今後資料の増加する可能性はあるといえよう。その他、近接地域の例ではないが、群馬県上芝古墳や栃木県真岡町亀山古墳などは年代観が明瞭でないくらいはあるが円型墳に造り出しをつけそのうちに人物や馬型の埴輪を配した例は類似性を重視してもよいと考える。^{註65}^{註66}^{註67}

同時に、近藤氏も指摘されたように、実際には、同様な時期にあっても形象埴輪はおろか、単に円筒埴輪すらない古墳の方が圧倒的に多いのであって、こうした種類の一群が、摘出されるというのは注目して然るべきことのように思われる。特に、余り形象埴輪（この場合人物や馬形に限った方がよいかかもしれないが）が豊富でない関西方面では偶然に、それも被葬者乃至はその一族の好みによってこうした形制が保たれたと考えるのは単純すぎるようであ

る。特に岩子山古墳の場合のように、この地方に初現の古墳である場合には、先述の如く、古墳の築成そのものが何らかの外部的契機によってもたらされたとすれば、埴輪の使用も亦、古墳築成儀式の一環として欠くべからざる条件であったと想定することは決して無理なことは考えない。この場合古墳築造の規制とは単に墳丘の規制のみならず、葬送儀礼の規制であり、埴輪の配列や棺の形式までも含むものであった可能性は充分にある。^{註68}

大化薄葬令も古墳規制の一つであると小野山氏は指摘されているのであるが、薄葬令に含まれた内容は、単に墳丘の大きさのみならず葬送儀礼を内容としていることは、奈辺の情況をある程度示唆していると思うからである。

岩子山古墳築成時の規制がどのようなものであったかについては、現在、そうした観点から資料を整理した実績に乏しいため、確実なことは何一つ言えないのであるが、岩子山古墳及びその他若干の例からすれば埴輪のとり扱いも、「規制」の対象であったことを、今ここでひとつの仮定として提示しておきたい。

埴輪までが規制の対象たり得るかと言う問題については、埴輪の製作そのものが、特に形象埴輪において整美した形で存在すること自体、その対象古墳が少ないと、瀬戸内地域にあっても、實に散在的なあり方を示している点から、被葬者乃至その一族が葬送の際及び古墳造成の際に恣意的に、自己の支配下の人々に命じて製作させたとは到底思えない。埴輪製作に関しては、全くの素人が見よう見まねで製作し得るものであると仮定するには余りにもその製作工程の複雑さを無視したものと考察するからである。^{註69}

そうした点からすれば、埴輪製作も含めて、例えば木棺直葬とか、墳丘築成とか葺石の配列とかを含めて、少なくとも岩子山古墳の造成には例えば「墓造り集団」のようなものが関与し、遺物としては残り得ない葬送儀礼としての諸手続をも含めて采配をふるった指導者と^{註70}その一団がいたことを推定する方が、被葬者又はその一族が、それらのことを一切取り仕切ったと想定するよりは、はるかに現実性があり、妥当性のあるように思われる。この場合、被葬者又はその一族の掌握する集団は、葬送儀礼一般を取り仕切る墓造り集団指導者の言うが儘に動かされたものと見ることも可能である。

だとすれば、岩子山古墳は、本地域に本拠を置く集団が、自己の家父長のために「作った」ものではなく、外部的要因と歴史的契機によって、従来の葬制を放棄せしめられ「作られたもの」との解釈も成立するわけであって、以降、代々の家父長もそれを踏襲することの権利と義務を同時点で背離されたものと理解したい。

かかる観点に立つ限り、岩子山古墳以降の古墳築成については、形式・制度共に同墳の規定に従って、在地の住民によって一切がまかなわれるということも起り得るであろうし、それ故に、技術的な問題から施設の一部——例えば埴輪など——が欠如したり、規模が縮少したり、逆に大規模になったり、ある程度は恣意的な要素の導入もあったことが是認されるであろう。つまり、発生時や、それが忘却された頃の混乱状態を規制する時点では一定の規律

が保たれるが、それ以外は築造の運営を在地勢力に任せたために、むしろ古墳文化の自律的進展を見たのであるとも考えられる。

このように考えれば、岩子山古墳造成の外部的要因や契機が何であったかが具体的に示されない儘ではどうしようもない。

そこで今提出できるものは、未だ整理されたことではないが、本地域が、国家の政治的な面で深くかかわりを持つようになるのが、おそらく大和朝廷の朝鮮半島出兵の時点であろうと推察されていることである。この件については、岸俊男氏が「紀氏に関する一考察」^{註71}の中で、紀氏が瀬戸内諸国、特に讃岐・伊予に同族の分布を持つこと、及びその傾向が、古代における瀬戸内海航路の一つの動脈である四国沿岸航路と重複的な関係にあることを指摘されており、又、菌田香融氏も、岸氏の説を援用しながら、「古代のある時期には上述の四国ぞい航路のほうがより重要な意味を持ったときがあり、またそれが、あたかも紀氏一族の盛んに半島に雄飛した時期と相重ったのではないか」と推定され、更に「紀臣同族の分布状態は半島経営の繁忙を告げる5世紀後半から6世紀後半にかけて最も頻繁に利用された内渡航路を指示するだけでなく、紀伊水門および紀伊水軍の戦略的位置を明らかにしてくれる」とされている点は、時期的にも地域的にも、道後平野の持つ諸要素——熟田津、美田——を国家の政治的体制に巻き込む契機として充分のもののように思われる。

岩子山古墳の被葬者が、紀氏といかなる関係にあったかは知る由もないが、朝鮮半島出兵に際して、この地域が丘站基地のひとつとして活用された可能性は充分にあり、又船舶・物資・兵士等の運搬や徵集に、本地域の住民がかり出されたことは容易に想像される。

岩子山古墳の築成は、その結果として理解するのが、現在残されている微細な資料からする唯一の答えかと考える。

そして、あたかも時期を同じくして、紀氏の奥都城と推定される岩橋千塚中の大谷山第22号墳や井辺八幡山古墳が多数の埴輪類や供獻須恵器を持つ造り出しを伴った前方後円墳として表われることは極めて示唆的であると言わねばならない。特に、類例の少ない革帶形埴輪が、若干形制が異なるとは言え、岩子山古墳と大谷山22号墳と共に出土しているのも興味ある事実と言えるだろう。

あとがきに代えて

本古墳の報告を為すにあたり、今少し検討を加えてみたい問題として埴輪に関する考察があった。

関西地方（畿内を含めて）では、後期古墳における形象埴輪、特に人物・馬形の埴輪は余

り多くを知られていないのだが、松山地方でもその傾向はほぼ等しい。

その中にあって、明治年間に、既に松山の地に埴輪に関する報文が横地石太郎氏によって為されていることは看過し難い。横地氏は「東京人類学会雑誌第百七十二号 明治三十三年七月二十日」において「伊豫国松山市附近にて発見せし埴輪及土器」と題して、本地方における形象埴輪の検出を記されているが、この中重要と思われる点を抜き書きしてみると「松山市の東南三十町計を距てて賀ヶ峰及鶴ヶ嶽の両山あり其西麓に数十の古墳ありまた其處より一沢地を隔てて一帯の高地あり東野台と称し温泉郡東野村に属す……（中略）此地は松山近郊に於て最も古墳の富む所にして……今尚存するもの三四十個に降らざるべし中に瓢形をして大なるもの五六あり……（中略）一を長塚と称し周囲四十間計高さ二間群中の最大なるるものにして……（中略）…此塚の叢中に埴輪及土器の破片甚だ多し余其中を探して図面に載せたる一号より十一号に至る土馬及土偶の破片を得たり」とあり、本品は現在京都大学に保管されているが、岩子山出土品より細部は詳しく、同氏の図によれば鼻革、円形鏡板、引手、手綱の表現がみられ、他に人物、その他の埴輪もみられる。同氏は更に「此古墳には少くとも樹物中には土偶二個土馬二個以上ありたるものにて云々」とされ、同古墳群中には他にも「長塚の南三十間計に殆んど全大の瓢形壙一個あり多く埴輪円筒の破片あれども土偶土馬の破片と認め得へきものなし尚夫より西三四十間にある古墳より十二号に示す所の長頭壙と糸底ある壺一個を発見せり又其近傍に於て直径七寸計高さ九寸許りなる埴輪円筒の下部一を得たり帶一条を存す普通の埴輪と異り其色灰色にして硬きものなり」とあって、埴輪の出土する古墳が混在したこと、その中には純粹の須賀貢円筒の存在を明示している。

その他の地域として「松山市の西十町計にして江戸山あり通常西山と称す其東南麓に朝日八幡宮の杜有其近傍に二三の古墳あり埴輪の破片を有す」として岩子山に極く近い地域にも埴輪を持った古墳があったことをふれておられる。又「同山（西山・大峰台一筆者注）の南麓に一大古墳あり村人其頂を開きて相撲場を作れり多く埴輪の破片を出す中に十四号に示すが如き横切面の丁字形を為せるもの少なからず土偶若くは土馬の破片ならんか」「右の外松山市を中心として近傍一二里内の地にて埴輪樹物の破片を有する古墳多し……（後略）」と見通しを述べて措筆されているが、以降この分野での著しい検討と研究は為されていないように思われる。

しかし、この明治の時点では、三島神社、経石山を主体とする古墳群があって、その群集墳の中でも比較的大形の古墳に限って埴輪の使用されたこと、及び岩子山古墳近傍にも同様なものがあった可能性の示唆が為されていることは重視されて然るべきである。

横地氏の研究以降は殆んど見るものがなくて、次段階としては柳原多美雄氏が昭和6年に「考古学第2卷第5・6号」に、今度は視点をかえて埴輪窯址の研究から當時としての近況を記したものがあり「伊豫国荏原発見の埴輪窯址」と題され報文をものされている。この中で埴輪窯址の可能性あるものとして、道後平野には

- 1 湯泉郡荏原村大字西野奥池
- 2 " 生石村生石八幡宮裏山
- 3 " 莳原村大字三本木奥谷
- 4 " 湯山村溝辺字八幡原三ツ池上

等があり、いずれも登り窯と推定されている点と特に1及び4は祝部土器（須恵器）が伴出している点は重要である。

横地氏にしても柳原氏にしても、当時のことで年代を明らかにし得るものはないが、本地方でも古墳に樹立された埴輪の時期はそれ程年代を落して考慮されなくてよいかと思われる。

横地氏以来現在に至るまで馬形埴輪や人物埴輪がまとめて検出されたものは岩子山以外皆無であるが、人物だけは米漆出土といわれるものが一つあって、その他は全くみられない。米漆出土のものは刷毛目仕上げの痕跡なく非常に丁寧な仕上げで着衣の表現がある。

しかし、これも出土状態や年代を推定するに足る伝聞証拠もない。形象埴輪のあり方は如何にも唐突である点、系譜や工人の面でもっと多くの広い知見と事実を積み重ねることによって歴史上重要な意味を見出せるものと考える。

岩子山古墳からは須恵器そのものと言ってよい円筒埴輪が出土している。その年代は本文で推察したように6世紀初頭であるが、この時代に須恵器を焼くのと全く同一手法で焼成された円筒埴輪があるということは、逆に既にその時点で本地方でも須恵器の生産がはじまっていたことになりはしないだろうか。

絶対年代で6世紀初頭と言えば、古式の須恵器（I期後半か）の時期にあたる。その時期は從来の知見からすれば河内・尾張・出雲・吉備といった当時の先進国で須恵器生産が定着した時期である。少なくとも現在、道後平野ではその時期の窯址は見出されていない。

現段階では岩子山古墳のそれは他地域からの輸入ではないかと疑ってかかるのも一つの方法である。

須恵質円筒埴輪は岩子山古墳の近くの松山市別府町の清水神社境内から、古墳と思われない地点で第III型式の須恵器高壺や壺・大甕と伴出した例があり（参考図版1・2）、この遺跡の性格は不明だが、作りはまるで瓦のように厚手で、口径も50cmを超えるかと思われるものもあり、タガも断面凸形を為して、それも著しく高く、岩子山古墳のものと系譜を異にする。

岩子山古墳と作りが似ているのが波賀部神社の古墳出土品で、凸帶のつけ方は全く符号し、焼成も堅緻である。但し色調は完好的な灰色ではない。波賀部神社古墳の年代は不明瞭であるが出土品としてある平瓶からすれば6世紀後半又は末葉と下限は絞れそうであるがよくわからない。しかし少なくとも円筒埴輪の面から岩子山に結びつけることが可能である。系譜をたどれば岩子山型の埴輪円筒と別府町清水神社型とにわかれそうで、特に後者については北山古墳群中で筆者が表面採集をしたことがあって、注目に値する。

上記の諸点、何らかの見解を施したかったのであるが、資料の蓄積のない僅検討せずに終った。今後の課題である。

註

- 註1 松岡 文一「伊予金子山古墳」古代学研究17
- 註2 松岡 文一「川之江市史一古墳時代編」
- 註3 「唐子台遺跡群」今治市桜井国分唐子古墳群調査報告 今治市教育委員会
- 註4 野々瀬古墳群とも言う。
- 松岡 文一「野々瀬群集古墳の調査」愛媛考古学第2卷第1号
- 註5 小田登志正「甲賀原古墳」愛媛考古学第1卷第2号
- 註6 松岡 文一「各地域の後期古墳——伊予」古代学研究30
- 註7 西田 栄「相の谷古墳発掘調査報告書」愛媛県教育委員会
- 註8 茂木 雅博「前方後方墳概説」「前方後方墳」雄山閣
- 正岡 隆夫「愛媛県前期古墳集成」
- 註9 松岡 文一「愛媛における古墳文化の概要」伊予史談171号
- 註10 長井 敦秋・森 光晴「三島神社古墳発掘報告書」松山市教育委員会
- 註11 西田 栄「新指定県史跡一絆石山古墳」愛媛考古学第1卷第2号
- 註12 註10に同じ。
- 註13 「愛媛県史跡名勝天然記念物一覧」愛媛県教育委員会（昭和26年）
- 註14 小林 行雄「三角縁神獸鏡の研究」京都大学文学部紀要 1971年。
- 註15 例えば、河出書房「日本の考古学IV」「中国・四国」古墳一覧表にも記載洩れと混同がある。
- 註16 「全国遺跡地図 38愛媛県」国土地理協会（新版）
- 註17 松岡 文一「愛媛県下の箱形石棺」「川之江市史 古墳時代編」川之江市教育委員会
- 註18 柴村敬次郎「狩獵絵画のある弥生式土器」私たちの考古学 第9号
- 註19 学術発掘によって知られたものは皆無であるが箱形石棺の分布があり、（註17参照）その他横穴式石室の壊滅したものは多い。例えば拙稿「松山市別府町出土の家屋の線刻絵画について」愛媛考古学2-2。
- 註20 松山市で現在歯科医を開業されている古川哲氏が昭和30年頃遺物の採集につとめられ、第III～第IV型式の須恵器及び金環・銀環、刀子、練玉（土製）類を、市立高浜小学校裏山周辺で収集されていた。
- 他に、高浜小学校にも藏品として土器類（須恵器・土師器）が存する。
- 遺構としては狭道が欠落した横穴式の小石室や箱形石棺の他に、一辺2mを超える巨石も露呈していた。これらはすべて造成工事で消滅してしまった。
- 註21 北山古墳群中の多くは開墾に伴って開掘されているが石材を抜きとられているものが多く

横穴式石室を推定させるものがほとんどである。

昭和29年やはり開墾に際して一墳が盗掘を受け、愛媛大学の西田教授のお伴をして視察に赴いたことがあった。筆者の手許にある写真では小さい礫石を多く用いた古式の横穴式石室で、提瓶、横瓶、壺等の須恵器は第Ⅲ型式と想定され、銅鏡2個（1個は完形、他は半存）と刀子等が伴出していた。

この東南方向には久万台古墳群があり、昭和27～30年当時、松本常太郎氏が主に資料収集をされ『にきた津』に発表されている。

註22 正岡 疎夫『愛媛県前期古墳集成』1968年

註23 近藤 義郎『蒜山原——その考古学的調査』岡山県 1952～1953

註24 末永 雅雄『埴輪』古文化叢刊 昭和22年。

註25 同 上

註26 近藤 義郎『前掲書』

註27 服部 貞蔵『メクサ4号墳発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告5 1972。

註28 服部 貞蔵『カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』玉城町文化財調査報告I 1972。

註29 斎藤 忠「古墳の向き」『日本古墳の研究』昭和36年

註30 末永 雅雄『日本上代の武器』昭和16年

註31 小林行雄『鐵製素環頭太刀について』『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』

昭和27年

註32 泉森 敏『池ノ内7号墳』「鉄製素環頭太刀出土地名表」『鰐余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊 昭和48年。

註33 『唐子台遺跡群』註3に同じ。

註34 大場 磐雄「伊予国御幸寺山古墳覚書」史述と美術 17—5 史述美術同攷会

「内反素環頭出土の遺跡例」禁足地発見の遺物『神道考古学講座 第5巻』昭和47年。

註35 小田 幸子『小田部古墳から出土したガラス玉の化学的研究』『古墳時代研究I——千葉県市原市小田部古墳の調査』古墳時代研究会 1972

尚、この項については、小林行雄「コバルト着色ガラス」『統古代の技術』をも併せて参考とした。

註36 註1及び註10。

註37 高橋 健自『古墳発見石製模造器具の研究』帝室博物館学報一 大正八年

註38 榎山 林繼「神坂跡」『神道考古学講座第5巻』及び大場磐雄『神坂跡』1970参考。

註39 末永・森・島田『和泉黄金塚古墳』日本考古学協会 1954

註40 近藤 義郎『蒜山原』（前掲書）

註41 註10

- 註42 松岡 文一『川之江市史』（前掲書）
- 註43 斎藤 忠『日本古墳文化資料総覧 第3冊』によれば道後平野で2例の出土がある。
- 註44 桜山 林雄（前掲書）
- 註45 橋本 誠一「池田古墳の調査」『城の山・池田古墳』和田山町、和田山町教育委員会 昭和47年 第50回の5 壺形埴輪にみられる。
- 註46 森浩一・広瀬常雄・大野左千夫「東造り出しの遺物」『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部考古学調査報告 第5冊, 1972
- 註47 増田 精一「埴輪馬にみる頭絆の結構」考古学雑誌 45-4
- 註48 久永春男・田中稔 編『守山の古墳』1963年に梅原治博士発掘と記されている。
- 註49 梅原 実治『葛野郡松尾村穀塚』京都府史調査会報告第2冊 大正9年。
- 註50 楠口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』和歌山市大谷。和歌山市教育委員会 昭和34年
- 註51 梅原 実治『伯耆下北条の一古墳』『近畿地方古墳墓の調査二』日本古文化研究所 昭和12年
- 註52 田辺 昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966
- 註53 今井亮・渡辺健治・神原英郎「古墳外表の土器群」考古学研究 第16巻第2号 62 1969
- 註54 松本正信・加藤史郎他 姫路市文化財調査報告I 1970
- 註55 近藤 義郎「備前邑久町我城山6号墳」古代吉備 第6集 1969
- 註56 小林 行雄「中期古墳時代文化とその伝播」『古墳時代の研究』所収1961
- 註57 鎌木 義昌『鶴鳩古墳』総社市教育委員会1965
- 尚、愛媛県内でも石墨片岩製品の類品は今治市下胡より須恵器I型式後半のものに伴出している。松岡文一「伊予の赤土遺跡・下胡遺跡出土の須恵器」古代学研究 35。
- 註58 小野山 節「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系3 日本III』昭和34年
- 註59 二宮治夫・松本和男「北山古墳群(3)」中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4) 1973
- 註60 今井亮・渡辺健治・神原英郎・河本清「美作津山市沼六号墳調査報告」古代吉備 第6集 1969
- 註61 正岡 瞳夫「徳利山古墳発掘調査概報—第2版」1968 プリント版
- 註62 道後平野東北部山麓地帯には、三島神社境内古墳、経石山古墳、波賀部神社古墳、川上神社古墳等の40~50m位の前方後円墳が時系列的に点在し、特に経石山はやや古式を保っており、岩子山より先行するかと思われる。この一帯はおそらく、道後平野の中心部を古くから掌握し君臨した一族の墳墓地と思われるが、その支配範囲の程はうかがえない。
- 又、道後平野北部の北条方面にも古式の全長75mに及ぶ前方後円墳が知られており、(正)

岡「愛媛県前期古墳集成」)古くから中央権力とかかわりを持ったと推定されるも、後に統くものが明確でない。

註63 伊東信雄・伊藤玄三『会津大塚山古墳』会津若松史別巻I 昭和39年

註64 註19・20・21参照

註65 小野山 節「五世紀における古墳の規制」考古学研究 第16巻第3号及び「大古墳の世紀」『古代の日本5 近畿』角川書店 昭和45年。

註66 近藤 義郎「吉備国における埴輪の変遷」古代吉備 第2集 1958

註67 末永 雅雄『埴輪』(前掲)

註68 水野 正好「埴輪芸能論」『古代の日本2』の末尾にも同様の主旨がみえる。

註69 近藤 義郎「埴輪製作の工人」『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会 1960

註70 「兼造技術者の集團」としては、かつて喜谷美宣氏も想定された。(「後期古墳時代研究抄史」「日本考古学の諸問題」1964)しかし、ここでは葬送儀礼全般をも包括した意味で用いたい。

註71 岸 俊男「紀氏に関する一試考」『日本古代政治史研究』所収 昭和41年

註72 薗田 香融「古代海上交通と紀伊の水軍」『古代の日本 5 近畿』

註73 末永雅雄・薗田香融・森浩一『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究紀要 第2冊 昭和42年

註74 尚、本項については、上記註以外にも西鳩定生「古墳と大和政権」岡山史学10号 1961年
近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』1952年 から示唆を得るところ大であった。

図版 1 岩子山古墳遠望（東方より）



図版2 岩子山古墳遠望（東方より）



（柳野氏提供）

図版3 岩子山2号墳より古道跡方面を望む（昭30年4月）



図版 4 岩子山古墳群墓部の調查





図版 5 岩子山古墳墳丘（南方より）
昭和30年7月



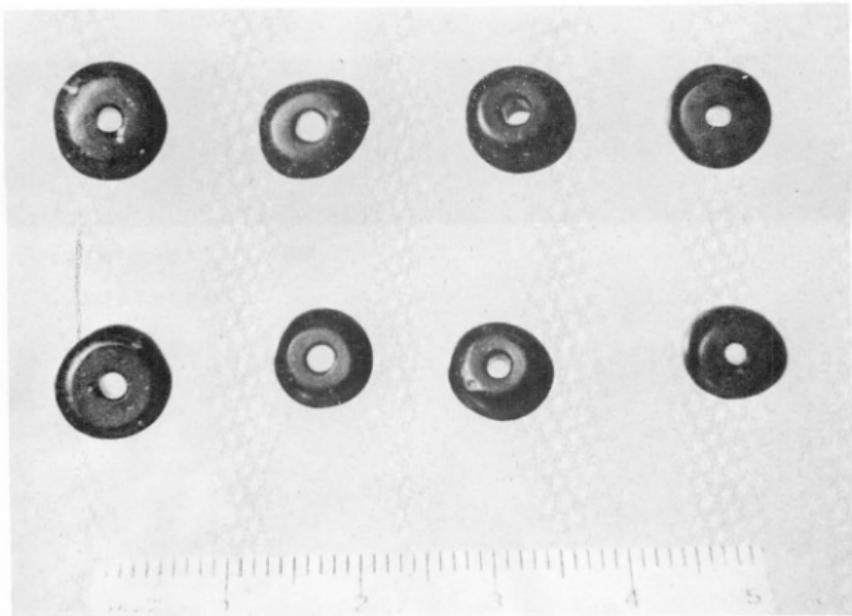
図版 6 岩子山古墳墳丘（西方より）
昭和30年7月



図版7 岩子山古墳全景（西方より）
(昭和30年12月29日)
左端人物は松本常太郎氏



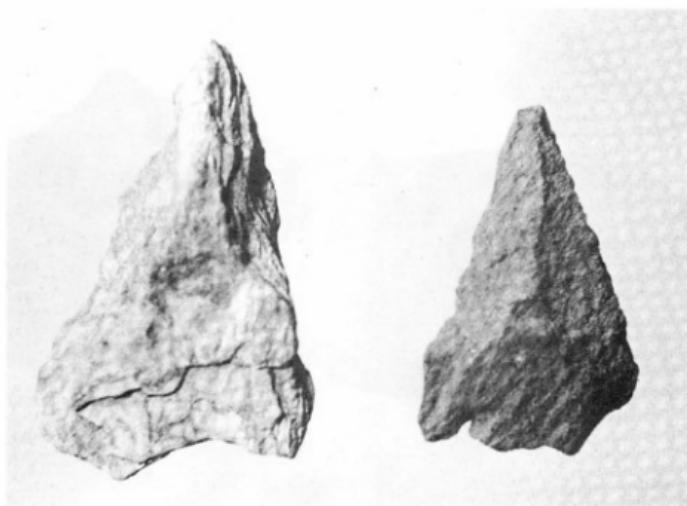
図版8 莖石散乱状況（昭和30年）



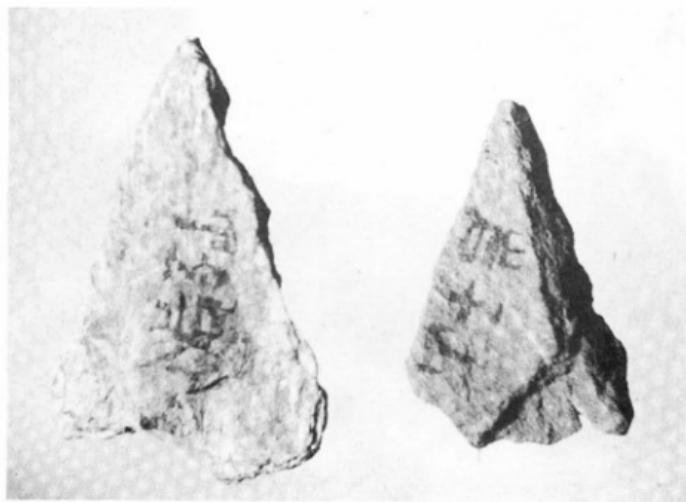
図版9 ガラス製丸玉



図版10 ガラス製丸玉断面



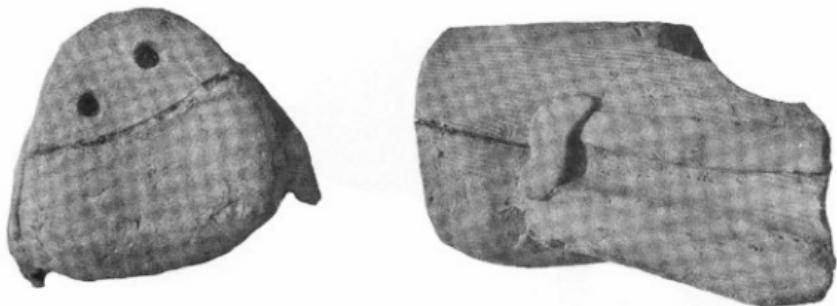
図版11 石製模造品（表面）



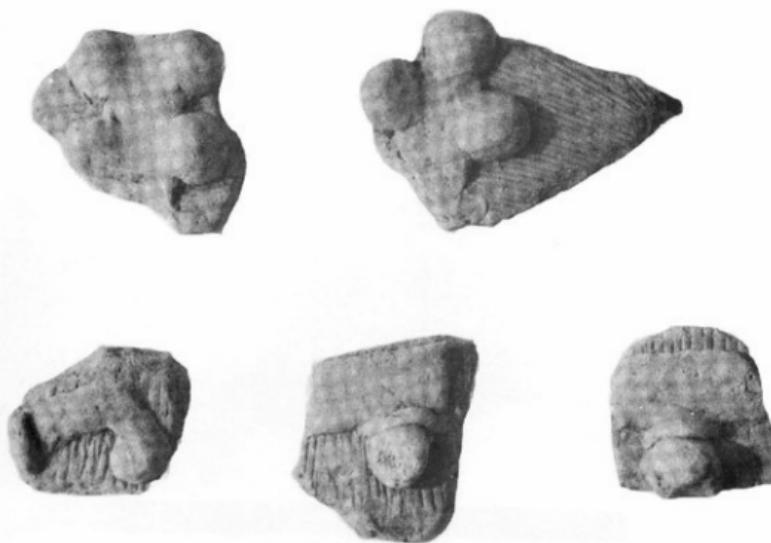
図版12 石製模造品（裏面）

圖版13 人物埴輪

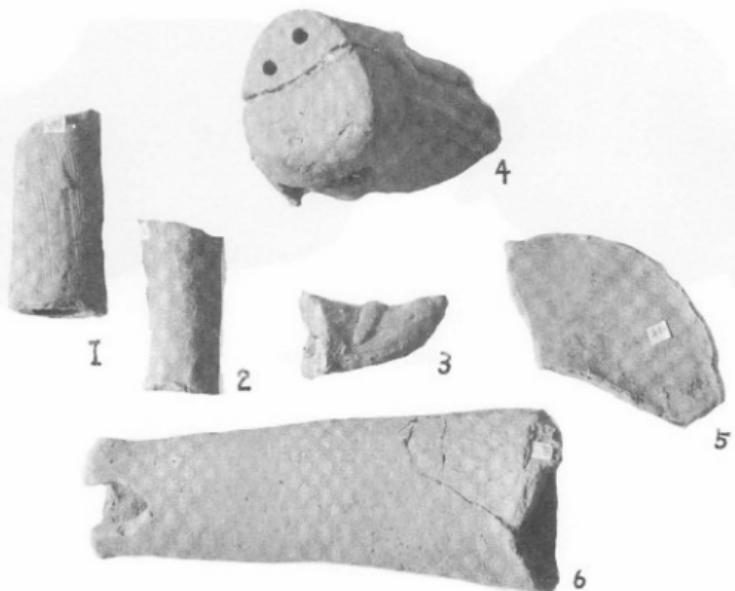




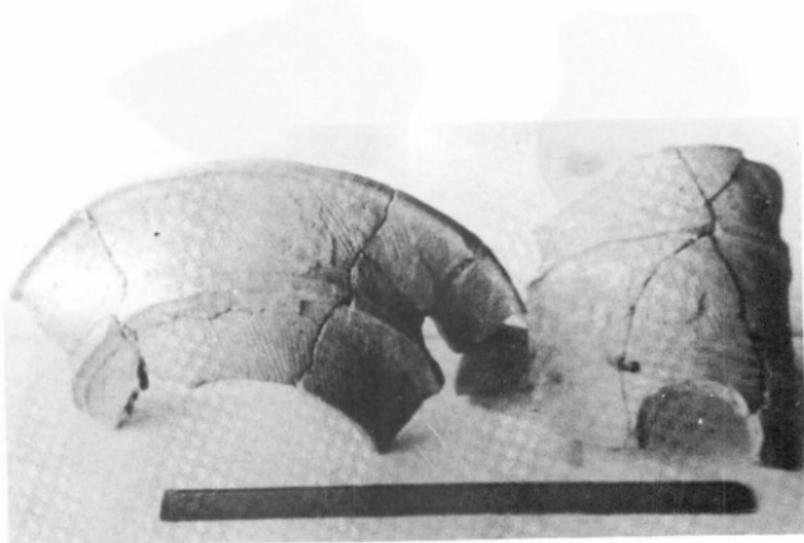
圖版14 馬形埴輪頭部



圖版15 馬形埴輪片



圖版16 形象埴輪片



圖版17 円筒埴輪 (昭和30年撮影 複写)



参考図版 1

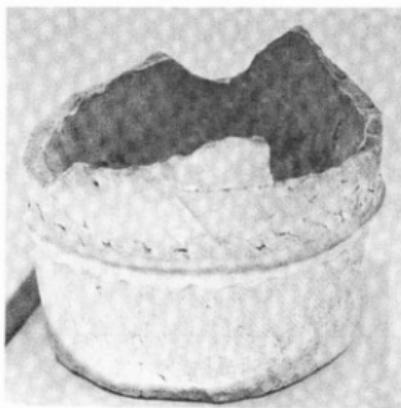
大阪大学蔵



参考図版 2

大阪大学蔵

須恵質埴輪円筒（清水神社出土）（物尺 5 cm）



参考図版 3 波賀部神社出土

大阪大学蔵

松山市文化財調査報告書

- | | | |
|---|------------|-----------|
| 1 | 三島神社古墳 | 昭和47年（絶版） |
| 2 | 天山・櫻谷古墳 | 昭和48年（〃） |
| 3 | 長隆寺廃寺跡 | 昭和49年 |
| 4 | 古照遺跡 | 〃 |
| 5 | 釜ノ口遺跡 | 〃 |
| 6 | かいなご・松ヶ谷古墳 | 昭和50年 |
| 7 | 国道バイパス概報 | 〃 |

松山市文化財調査報告書 第8集

岩子山古墳

昭和50年7月20日

発行 松山市教育委員会
〒790二番町四丁目TEL(0899)48-6600~4
社会教育課

印刷 有限会社 青葉図書
